トランスマイクリエーション

Rinn5

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
トランスマイクリエーション

【Ｎコード】
Ｎ９６２４Ｘ

【作者名】
Ｒｉｎｎ５

【あらすじ】
ただの高校生だったはずの俺、神坂優斗（かみさかゆうと）は、最近世間を騒がしていた通り魔に襲われかけた幼馴染を庇い助けた。そこで終わってればいいものの、俺は逃げ出した犯人を捕まえようと躍起になって、後先考えず道路に飛び出してしまいトラックにひかれてしまった。
ああ、儚き人生。しかし、物語はまだ終わらない。気づけば俺はなぜだかまだ生きており、そして、目の前には武装した謎の集団がいた。さらに、わけもわからず謎の集団に襲いかかられ二度目の死を覚悟したその時――

行き当たりばったりの主人公がファンタジー世界で奮闘していく物語です。

資料集

＊この資料集にはネタバレ要素が含まれている場合があります。「トランスマイクリエーション」を初めて読む方は飛ばしてプロローグからお読みください。

国紹介と地方紹介はある程度物語が進んだら増やしていく予定です。

世界略地図　〔国編〕

＞i374966／46966＜

●森（ニリム）の国

六大陸あるうちの一つであるオーストラリア大陸程の大きさの大陸の半分を占める国。国の面積のほとんどが森に覆われており、森林資源が豊富な所。そのおかげで家具や衣服などの文化が特に発達した。首都は最南端の森の中に位置し各街とは森を切り拓いて造られた街道でのみ繋がれている。暮らしている種族はバラバラであるがコボルド、ワーキャット、ホビットなどが最も多い。民主制の国家で良くいえばのどかな国で、悪くいえばど田舎である。家はツリーハウスや大樹をそのまま利用したものが多い。有名なダンジョンは“静寂の森”、“迷いの森”、“旧１２４号線街道”。

プロローグ（前書き）

初投稿です。
内容も更新もかなりのスローペースになりますが。頑張っていきたいと思っています。

駄文ですが、暇つぶしに読んでやってください。

プロローグ

刃、刃、刃、刃。

それは物を切るもの、あるいは人を斬るために存在するもの。

常日頃平和的に毎日を過ごしていれば見る機会すらほとんど無いそんなもの。

事実ただの高校生である俺は、料理をするときでさえ包丁をにぎればビビって手が震える。

そんな非日常の塊が今、俺の命を刈り取らんとしてこちらに向かってきている。

鈍色に光るそれは、ところどころに赤い液体がついていてこれまでにもたくさんの命が刈り取られてきたってことがわかった。

そして、当然ただの高校たる俺は突発的なそれを回避できるはずもなくぶざまに切り刻まれていく。

右足、右腕、腹、そして首筋。

順に切られた部分からせき止めていたダムの水が決壊し、そのあふれんばかりの容量をもってして水撃に変わるように血が噴き出した。

あぁ、ちくしょうめちゃめちゃいてぇ。

何だかよくわからない何にたいしてかさえわからない後悔と理不尽なことにたいする怒りが痛みによる叫び声とともにいまにも爆発しそうだ。

現に俺は、情けない姿だけは曝すまいと唇を血がでるまで噛み締め俺を切った相手を睨み付けようとしているが、その目からは涙がとめどなくあふれ出てきてろくに相手の顔も見えちゃいない。

顔はもう涙だか涎かわからないものでぐちゃぐちゃだ。体も血だか汗だかわからない液体でベトベトして気持ち悪い。

心拍数が上がって体が火照るように暑い気がするのに、背筋から冷気のようなものが駆け巡る感じがした。

ああ、また死ぬのか。

諦めにも見える薄い笑みがこぼれる。

人は、死ぬとき走馬灯のように過去を振り返るって言う

がありゃ嘘だな。少なくとも俺にはそれは当てはまらなかったようだ。

何より今もなおどうにかして生き残れないかと心に反して動く目が、体が、そうさせてくれない。

通常では考えられないぐらいの情報が頭をパンクさせようとするがごとくぶち込まれ、そのせいか頭痛がする。

案外こっちの頭痛の方が体中の傷よりも痛いかもしれない。

しかし、その痛みも次第に感じなくなっていく。頭の中に靄が、かかるかのように、意識がとうのいていく。

そして……俺は、薄れゆく意識の中それに気づいた。

秘密の花園に咲く薔薇のように濃くそして鮮やかな血しぶきが舞い散るこの混沌のなかで。――天使を見つけてしまった。

第一話　日常はストーカーと共に

成績、運動神経ともに普通……あ、いや足だけは少し速いか。

そして、学校および私生活での問題は一切なし、髪も目も目立ちたくないという理由で、今まで一度も染めたこともなければ、カラーコンタクトなんぞを手に取ったこともない。

髪の手入れさえふだんあまりしないのでいつもぼさぼさだ。

容姿は……容姿は、普通である……と、おもう。

と、とにかく、そんな平々凡々な17歳、神坂優斗（かみさか ゆうと）には、ある悩み事がある。

「――でね、あまりにもしつこかったから蹴り飛ばしてやったんだ。で、そしたら――」

なんの取り柄も問題もないはずの俺が、いや、ないからこそなのか、俺には幼いころから悩み事があった。

「――もう、これだからああいう人は――って、ちょ、ちゃんと聞いてるの優斗。聞いてますか～おーい、ゆーとさーん。おーい。」

友人は皆この悩みについて俺が話そうものなら、<はてろ>だの<唐変木>だの<このイケメンめが……リヤ獣は爆発しろ>だのむちゃくちゃに言ってきやがる。

くそ、なんでだよ……俺はケメンなんぞじゃないっちゅ～に、そもそもイケメンというのはだな――

「ね～てば！！　聞いてるの優斗！！」

ズイっ！

「っうを！！なんだよ、ちょ、近いってびっくりするじゃないか。」

「ちょと～さっきから話しかけてるのに、ずっとだんまりして……ちゃんと聞いてたの？それとも、そんなにも私と、しゃべるのはいやだっていうの！」

「いやいや、ちがうって！！　ちゃんと聞いてたって、ほら、あれだろ……えっと、その～……そう！　委員長の田中が飼ってる猫のジョルジュの話！　いや～ほんとあのふてぶてしいデブ猫みてたらなんか癒されるよな～。こないだなんて俺、あのデブ猫のおかげで――――って、あの～星羅さん。お目がお据わりになられていますよ」

「……はぁ、今、私が話していたのは昨日私に告白してきた

男の子の話！　優斗が話してくれって言ってきたから話してるんだよ。ほんとうだったらあんな人のこと、思い出したくもないっていうのに」

「あ～そだった。そうだった、ゴメンって。それにしても星羅はほんっとモテるよな、今月で何回目だ？」

そう俺の悩みとは今、俺の目の前にいる美少女、時任星羅（ときとうせいら）のことである。

いや、彼女がどうというわけではない。むしろ彼女は完璧といっていいだろう。

流れるような黒髪は、肩のあたりまで伸ばされており、雪原を思わせるようなその肌は白く透きとおっている。そして、黒真珠を思わせるかのような勝気な瞳は見ているだけで吸い込まれそうだ。

さらに、彼女の秀でているところは、容姿だけではない。テストをやらせればいつも満点をとり。スポーツをやらせればその素晴らしすぎる運動神経を隠すことはできようはずもなく。そして何より、極めつけは誰とでも平等に接する性格と太陽を思わせるような笑顔と明るさである。この性格のおかげか彼女のファンは男子だけにとどまらず女子にもたくさんいる。

「む～こっちは、迷惑しているだけなの。ファンクラブとか名乗る意味わかんない集団解散させたばっかなのにぃ……鬱だ～ファンク

ラブは優斗のだけでいいっていうのに」

「はぁ？　なんでそこで俺の名前がでてくるんだよ。俺はお前のファンクラブなんぞに入っとらんての」

では、問題とは？それは、彼女が幼馴染という理由だけで、俺とほぼ全ての行動を共にしていることである。美少女の幼馴染だと～ふざけんな。うらやましすぎるぞ！と大半のやつはうらやましがるだろう。

いや、俺だってこんな子が近くにいるだけならそりゃ嬉しいよ。……そう、だけなら。星羅の熱狂的なファン（ストーカ野郎）が星羅に振られたことなどで、何かにつけて俺に逆恨みをぶつけてこなければ。

「はぁ、ほんっと優斗は鈍感っていうか、にぶチンっていうか……私の気持ちにも気づかないし。」

さらに、悪質なストーカーとなると時々星羅にまで被害が及ぼうとすることがある。そして、その対処を俺が陰ながらしているせいということもあり、被害は甚大である。

今だって、俺はただ穏便に下校したいだけなのに隣の電気屋を曲がって商店街から路地に入った途端に何者かが襲ってこないかと、びくびくしている。こんな生活のせいかいつの間にか俺の足はかなり鍛えられた。……ええい、ちくしょう。どう見ても立派な大根足です。本当にありがとうございました！！

「ん？ゴメン、何て？聞こえなかった。」

「な、っなんでもないわよ」

「……そんな、怒鳴らなくてもいいだろうに。それよかファンクラブ（ストーカー）には気をつけろよ最近の奴は過激だからな」

「それは、こっちのセリフよ」

「うぇ、縁起でもねぇ事いうなよ。俺は、昨日のあいつだけでもうおなか一杯というか、足がいっぱいいっぱいだってのに」

「……昨日のあいつ？　って、そういえば昨日なんで先に帰っちゃたの？　おかげで私、一人で帰らなくちゃならなかっ――」

『――次のニュースです。○×県の○×○市でまた、連続通り魔事件がおきました。被害者は２０代の女性で連日と同じく固執に何度も刃物で刺された跡があり。今回の事件を含めると軽傷者は二名重傷者は四名、死亡者にいたっては二名と異例の事態のなっており、警察は対策本部を○市に移し捜査活動を――』

「また、通り魔？　て、言うかこれ私たちの住んでる地区じゃない！　こんな身近まで通り魔きてたんだ。なんか……怖いね。」

ふと足を止め、普段は見向きもしない電気屋の液晶テレビに俺も目を向ける。どうやら通り魔は何かオカルトチックな文字を犯行現場にいつも残しているようだ。かなり不気味だ。最近までいたい病気からいまだに抜け出せずそういったものに憧れを抱いていた俺でさえうすら寒く感じるほどなので星羅のそれは、普段のストーカーのせいもあいまって相当のものだろう。

「ふっ、大丈夫だよ、星羅だったら通り魔なんて拳ひとつでけちょんけちょんさ。そして、俺はそんな白馬の王子様にメロメロメロンってね」

「はぁ、優斗そこは、嘘でも俺が守ってやる。とかそういったこと言うべきでしょ、メロメロメロンって……。なんか、色々と不安がってた私のほうがバカみたいじゃないまったく」

そう言うやいなや、星羅は先ほどのニュースのことなど忘れたかのように、また昨日のことの不満を俺にぶつけてきた。

日はもうほとんど落ちあたりは薄暗くなってきている。

罵倒を聞き流しているうちに、気づけば俺達は、商店街の喧騒を抜け自宅まで後数１０メートルといったところまで来ていた。

目の前の青信号を渡りさえすれば我が家はもう目と鼻と先だ。ちなみに、星羅の家は俺の家のすぐ向かいである。

「ねえ、ちょっと優斗。」

「なんだよ、早く渡っちまわねーと信号変わるぞ」

現に信号の色はもう点滅を始めている。周りの人はもう渡り切っており残すは自分達二人だけであった。

「ねえ、あの人なんかおかしくない？　さっきからずっとこっちを睨んできてるんだけど。ほら、あの黒っぽいカッパ見たいなのかぶってるひと」

「ん？　って、あれ隣のクラスの黒沢浮世（くろさわうきよ）じゃね？ほらいつもタッロト占いとかしてる変わり者って有名な女子。そんなことより、信号変わっちまったじゃねーかよ」

「そんなとって……。いくら変わった子だからって普通あんなところ構わずに睨み付けてくる？それにあの子普段は大人しい子だよ――――っえ、ちょ！！黒沢さん赤、赤、信号赤だってば」

まだ少し離れているが、トラックがこっちにきていた。

さらに運が悪いことは、こういう時に限って重なるらしく。よく見れば運転手はうつらうつらとしている。

星羅の悲鳴じみた声と黒沢の突発的な信号無視が辺りを騒然とさせる。

「みぃつけた」

なんなんだあいつ、あんなにずっとこっちを睨みつけていたのに、俺と目が合ったとたんニヤけ出しやがったぞ。

ぶつぶつと呟きながらニヤけ続けている黒沢は、おもむろに今までその黒フードのなかに隠すようにしていた右手を振り上げ星羅に飛び掛かった。

振り上げられたその右手を見れば、そこには刃渡り３０センチはあるかというぐらいの深紅の狩猟用ナイフが握られていた。

異形の物のあまりの禍々しさに誰もが唖然としてしまう。

それは、星羅も例外ではなかった。

「あぶねぇ」

「きゃっ」

ナイフが星羅を切り刻まんとしているすんでのところで、星羅を抱きかかえるようにその脅威から庇った俺は、腕に刺さったナイフをそのままに痛みをこらえながら黒沢の方へ向いた。

「っつ～、ちくしょう、痛ってぇなあおい。てめ～黒沢いきなり切りかかってくとはどういう了見だぁおい」

「そっそんな、なんで。なんでそんな物を……。私はただ、優斗様に最後の供物を捧げようとしていただけなのに。なんでっ……」

黒沢は意味の分からないことを叫びだし、この世の終わりだと言わんばかりの形相で、その焦点が合わない目をさ迷わせながら、しかしその足取りはしっかりと、あとずさるように元来た道を逃げだした。

「おい、まて逃がすかよ」

ここで、俺が庇った時に浴びた血で震えている星羅のことを考えてやっていられれば、こんなことにはならなかったのだろう。星羅が襲われたということに激昂し我を忘れていた俺は、黒沢を無意識のうちに追いかけてしまっていた。

眩しいくらいのトラックのライトのなかで、最後に聞いたのは、つんざくような誰かの悲鳴じみた俺の名をよぶ声だった。

第二話　馬車の中で竜は眠る

目蓋(まぶた)が重い、視界が真っ暗だ。

俺は死んだのだろうか……不思議と痛みを感じなかったように思える。

いや……、あの勢いでトラックに当たっといて即死でないはずがないだろう。

じゃあ、一体今のこの俺は、なんだっていうんだろうか？

まさか、天国！？　いやはや、そういった類(たぐい)は一切信じていなかったんだが。

こんな、風にそれを否定されるとはな……。って、なんで俺はここが天国って決めつけているんだろうか。目蓋(まぶた)すらまだ開けていないって言うのに。

いや、俺だって逝くんなら天国の方がいいし別に好きで地獄に逝きたいともおもわんけどさ。いかんせん。まったく俺よ、どうしてそんなに考えが安易なんだよ。そもそも、あの時だ

ってもっとよく考えて行動していれば――――はぁ、やめよ、なんか寂しくなってくる。

それにしてもさっきから体中が重たい。と、いうかここかなり寝心地が悪い。背中が痛い。

……そろそろ、起きにゃならんよな。いつまでもこのまま寝そべってるわけにもいかんだろうし、なんか、遠くから軍靴の音も聞こえてくるし。はぁ。

できればこのままずっと寝そべっていたいんだが。体、だるいし。……もういっそ、このままずっと寝てようかな。いやいや、それならもっと寝心地の良いところで……ってまた俺は、現実逃避して。――ん、軍靴？

「よっと、……はぁ、起きちまった。てか、案外簡単に起きられた。じゃなくて、ここ……どこだ？」

見ればそこは、天国というには余りにも殺風景で。また、地獄にしてはあまりにもおどろおどろしくはなかった。見えるのは、大自然。

目の前には、7～8メートル程の幅の道のようなものが15メートル程の高さの岩壁沿いにある。

岩壁と道はかなり長くどうやらここは、岩壁沿いに造られた街道のようだ。さらに背後にある鬱蒼（うっそう）と茂る木々が制する先の見えない暗い森や、見上げれば岩壁の端からも緑が見えることから、人里からはある程度離れたところであろうということがうかがえる。

いきなり自分が見知らぬ場所にいるだけでも俺のキャパシティーはパンク寸前だというのに、そこにはそれすらもどうでもよく思わせるような光景が広がっていた。

人、人、人、――50人程の人がそこにいた、いや、街道らしきところなのだから、人が多少多くいてもさして問題はないだろう。問題なのは、彼らの姿と目の前で繰り広げられている戦闘である。

そう、戦闘。彼らはなぜか戦っているのだ。

屈強そうな体躯の男たちがその身に甲冑をつけ４０人がかりで馬車３台を取り囲むように守っているところを、耳の上や額に角を生やし、さらに数人だが羽や尻尾までも生やしている人々が襲いかかっている。

おいおい、何だよこれ！　なんであの人ら角とか羽とかナチュラルに生やしてんのよ。てか何、あの髪と肌の色。赤色でさえもありえねぇっていうのに青とか緑とか。……初めて見たぞ、あんなの。

それに、あの甲冑と剣。本……物か。やべえ、何だあれ、何なんだよあれ！どこぞのＲＰＧゲームですかここは！！

角を付けた人々は、少人数ながらも常人では計り知れないほどの素早さと自分の身の丈と同じくらいの大きさ程もある大鉈を振りまわし騎士らしき人たちを翻弄していた。しかし、それもやはり数にはかてなかったのか、６人程斬り殺したあたりで次第に取り囲まれ。気づけば一人、二人と順に斬り捨てられていき。ついにはたった１人となってしまった。

そして、その最後の１人も今、その顔に憤怒の形相をはりつけながら崩れ落ちるかのように倒れた。

≪　くそう、悪魔どもめ！おい、積み荷は大丈夫か。被害状況は？≫

≪はっ、積み荷には問題はありません。……しかし、騎士（ナイト）クラスの者を2人も喪ってしまいました。さらに神官（メイジ）職の者が重傷を負ってしまい。今日はもう進むのは無理かと、すぐにでも野営地点を見つけませんと。≫

≪っつ～、しかたあるまい。残りの騎士（ナイト）　クラスの者を中心に3班に部隊を再編成する。くれぐれも、周囲の警備をおこたるな。目撃者は、発見しだい即始末しろ。≫

やっべ、あいつらこっちにきやがった。どうしよ、隠れるべきか！？あいつらの言葉何一つ理解できなかったけど、どう見てもヤバそうな雰囲気だし。何より目線がやべぇ。

って、どこにかくれれば！？　ここらへんで下手に隠れてもすぐに見つかるだろうし。

あぁ、ちくしょうどうすれば、と、とりあえずそこの草むらにでも――

ガサガサ

≪あっ≫「あっ」

「あ、あは、あはははは、……は、ハロ～な、ナイスミートユー」

ニコ

≪……死ね≫

ニヤ

俺を見つけるなり男はそのロングソードを振りかざしてきた。

「ちょ。ちょちょ。タンマ、……タンマ！！　ほら、俺何も持ってないって。なっ、だからほら、そんな危ないもん早く下せって。スマイル、スマイル――」

しかし、俺の言葉は男のロングソードと共に空(むな)しく空を切る。

≪ちっ、ちょこまかと悪魔が。素直に斬られてくたばりやがれ！！≫

「――スマイルって言ってんジャンよ。うを！あっぶね。」

これは、やばい、マジでやばい。言葉通じねぇよ。俺の全力のハッピースマイルセット丁重に返品されちゃったよ。どうしろってんだよ。

なんとか、紙一重で避け続けていた俺だが、それもさも当然のように長くは続かなかった。体には、避けきれなかった斬撃によるかすり傷がいくつもできていた。

さらに、騒ぎに気付いたのか残りの奴らもやってきており、俺は、もう逃げることすらもかなわない状況に陥っていた。

何だよこれ、死んだと思ったら。見知らぬ場所に倒れていてあげく、わけもわからん奴らに殺されるなんて。

くそ、くそ、くそ、くそ！！　何か、何かないのか。

俺の思いとは裏腹に、目の前の現実は非常に無情で。囲まれた俺は、俺の命を刈り取らんとする男たちの持つ死神の鎌により蹂躙される。

じわじわと訪れる死の足音に対し、必死に抗おうと俺の体は、なおも希望を探し続ける。

頭が痛い。ひどい頭痛だ。

しだいに、出血のせいか意識が朦朧（もうろう）となり始めた。

そしてこんな状況の中、俺はありえないものを見た。

神秘的に輝く空色の髪を腰辺りまで伸ばした１０人が見ればその１０人全てが魅了されるに違いないであろう、人形のような可愛らしさを持つ齢（よわい）１３，４くらいの少女が、その世にも珍しい髪と同じ色の瞳をこちらに、じっと向けていたのだ。

死の瀬戸際でありながら、俺はその天使のような

神秘的な美しさと機械じみた無機質な瞳に目を奪われていた。

はは、頭に血が回らないせいか、こんな妄想するなんて……。　しかし、妄想であれ何であれこんなかわいい子に最後を看取られるとは、俺も随分出世したもんだぜ。

無意識に少女の方に手を伸ばしていた。まるで、長年探し求めていたものをやっと見つけたかのように。

すると、少女は俺の手を取り何かを確信したようなそぶりを見せ。すっと立ち上がった

≪所有者（マスター）の存在の認証、完了。内蔵魔導高炉（オールグリーンギア）の始動確認、完了。敵の位置補足、完了。最優先事項（オールグリーンエネミー）の確認、完了（オールグリーン）戦闘を開始します　≫

キュイーンとタービンを回すような音と共に少女の姿が消えたかと思ったその瞬間、俺を取り囲んでいた男たちの体が一気に爆ぜた。

≪な、なんだ。どうしたいったい何があった！？≫

先ほど全体を取り仕切っていたリーダーらしき男が、異変に気づいて声を荒げながら近づいてくる。

≪わ、わかりません。そこの悪魔を仕留めようとしたら、いきなり妙な女が――う、うあああああ≫

次々と、残りの男たちも爆ぜて死んでいく。

≪く、だれか本部に救援要請の伝令を伝えてこい！……おい聞こえてなかったのか！！大至急、救援の要請を――≫

≪必要ありません。終了（チェックメイト）です≫

死屍累々とした中、少女がふわっとまた俺の前に突然現れた。そして、俺の胸にそっと手を置き。

≪Ｓｉｅ　ｚｕ　ｍｉｒ　Ｉｃｈ　ｚｕ　Ｉｈｎｅｎ　Ｅｉｎ　Ｖｅｒｔｒａｇ！≫

その鈴のような澄んだ声を高らかと上げた。

すると、不思議なことに二人を包むかのように辺りが黄金色の光で満ち溢れていく。

「マスターとの契約を確認。これから再生治療魔法を展開します。」

少女がまた呪文を唱えだすと。今度は二人の体が碧色に光りだし見る見るうちに俺の傷はゆっくりだが確実にふさがっていく。

しかし、俺の傷が治るにつれて、少女が時折だが苦しげな顔をし始め。さらには、その体も下から徐々に薄く透明になっていく。

「え、えっと。大丈夫なのか？」

「はい、問題ありませんマスター。マスターの傷は責任を持ってこのアルス・Ｘ・マキナが、その全存在を使って治しますゆえ」

「ちょ、ちょっと待った。そういう意味じゃない、君のそれは大丈夫なのか、消えかかっているぞ。いやまて、落ち着け俺。さっきこの子は何て言った――そう、全存在を使ってマスターを治癒する！？どういう意味だ。今の君の状態と何か関係しているのか！？」

「ですから、私の存在を全て魔力に変換しマスターを私が消滅してでもお治し――　「今すぐ、これをやめるんだ！！」

「しかし、それではマスターの治癒が」　「いい

から、早く。」

「了解、再生治癒を解除します。」

すると、俺たちから発せられていた緑色の光は消え失せ。そして、彼女の透明化は膝辺りでとまった。

「ふう、よかった……一時はどうなる事かと。おい、君もっと自分を大切にしろよ！！まあ、ともかく、アルス・X……マキナさんだっけ。助けてくれてありがとう。」

「いえ、マスター。私はマスターの僕として当然のことを、したまでです。」

「そう、それだ、そのマスターってのは何なんだ。

それにさっきのは？　君は？　そもそもここはどこなんだ？」

「貴方様はこの世界の新たな我ら精霊の主たる精霊王様になるべく転生なさった存在。そして、私は魔導機構を司る魔工の精霊であり先ほどの契約により晴れて正式にマスターの僕へと加わった者でございます」

は、……。何、転生？　精霊王？　契約？　ナンデスカそれは。

その後、色々とアルスにこの世界のことを聞いた話をまとめると。

どうやら向こうの世界でテックソウルなるもの「たぶん黒沢が持っていた深紅の狩猟用ナイフのことだろう」を使った儀式により、俺はこっちの世界の精霊王へと転生させられたようだ。そして、なぜだか本人も知らないらしいのだが、生まれた時から精霊王にその存在全てを賭けて仕えよという使命をもったアルスが俺の転生をいち早く感じ取り。俺を迎えに行こうと来たところ、俺のことを人間が敵対している亜種人だと勘違いした奴らが俺を襲っていたのを発見したということらしい。

いや、バリバリ人間の姿しとるし……と嘆いていたらどうやら、この世界では黒髪黒眼というのは精霊にしろ人間にしろ亜種人にしろありえない色なんだそうだ。

「てか、まあもう、人間やめてるみたいだけど……」

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもねぇよ。それより、アルお前、俺は元の世界に戻ることはできないのか？」

「アル？　マスター、アルとは誰のことです？ここにはマスターと私しかいませんよ」

「お前だよ、お前。アルス・X・マキナなんていちいち長ったらしくて呼びずらいんだよ。だから、親睦を深めるって意味も込めてアル」

「アル……アル、いいですねアル！私、とても

気に入りました。こんな気持ち初めてです。この名前、大切にしますね！」

そういうと、アルは少し顔を赤らめ何度もマスターがくれた名前、マスターがくれた名前と呟いている。

「気に入ってくれたのはいいんだが、アル、お前顔赤いぞ。まださっきの存在消滅の後遺症があるんじゃないのか？あんま、無理すんなよ？」

いまだ一人で呟いているアルの顔を覗き込む。

「はひィ、だ、大丈夫ですなんでもありません」

「お。おう。そうか。ってそうだ。さっきも聞いたんだが俺は元の世界に戻ることはできないのか？」

「それは、……私にはわかりません。マスターは元の世界に戻りたいんですか？」

「いや、ん～まあぶっちゃけ。長年夢見ていたファンタジー世界にこれてかなり嬉しいよ、しかもいきなり精霊王なんていう胸高鳴るジョブになってるし。さっきは、かなり危なかったけど。これからここで暮らしていくのも悪くないなとおもってるんだ」

「でしたら――」

「でも、俺さ、向こうの世界でやり残したことがひとつだけあるんだ。それがちょっと心残りなんだよ」

「そう……なんですか」

話しながらさっきの男達からの戦利品をちゃっかりと入手するべく作業をしていると、残すは男達が必死に守っていた馬車だけとなった。

1台目と2台目の馬車のなかには寝袋や食糧といった冒険するための道具がそろっており、かなり良い収穫であった。

しかし、問題は3台目で起きてしまった。

そのなかにあったものは、なんと檻の中で眠っている少女であった。しかも、ただの少女ではなかった。少女の整った顔立ちや、その白髪の背中まで伸ばされたふわふわとした髪に掛けられた薄汚れたフードによって隠されているかのようにそこには角があった。

少女の耳の上には羊の角のような少し湾曲した立派な角があったのである。

「……」

「どうかいたしましたか、マスター？　……女の子のようですね。マスターどうしますか？その子」

「どうするも何も、こんなところに1人置いていくわけにもいかないだろ。夜になったら何がでるかわからんし」

「ですが、マスター連れて行ったところでこの子にとっての安全はさほど変わりませんよ？」

「え？　なんでさ。こっちにはアルがいるし。それに、もしものときは、俺も微力ながらもこの子を守るからここに置いてくよかよっぽど安全じゃね？」

「すみません。マスター先ほどお伝えし忘れていたのですが私、先ほどのような力はもう発揮できません。存在を魔力に変換した際に精霊としてのランクが降格した上に契約したばかりなので魔力制御ができない状態なのです。さらに私、最近生まれたばかりなものでそもそものステータスが安定しておりません」

「うそ」　「ホントです」

「いやいや、だからって置いていくわけにはいかないよ」

「わかりました。では、私もできる限りのサポートを尽くさせていただきます」

「うん、よろしくたのむよ」

少女を担ぎ。取りあえずは、どこか人がいそうな所を目指そうと、これからの方針を決め、準備を整えた俺たちは、赤くなり始めた夕空を背に街道を進むのであった。

はあ、星羅いまごろどうしてるだろ。何事もなければいいんだけど――

こうして、俺の異世界転生の一日目は幕を閉じるのだった。

第三話　シチューの味

あれから、程なくして俺達はなんのトラブルも無く無事に宿場町らしき所までたどり着いた。現在は最初に発見した宿の中にある酒場で、注文した料理をまっている。

先ほど人間じゃないということだけで襲われた俺だったが、幸いにもこの町は亜種人と人間が共に暮らしている町らしく、町の門番に呼び止められこそしたがなんとか怪しいものではないと納得してもらい中に入る事が出来た。

そもそも、先ほど宿屋のおばちゃんに聞いた話しによると、亜種人を敵対視しているのは人間の中でも白の神と呼ばれる神様を信仰している者だけらしい。

まぁ、どちらにせよ俺とアルの瞳と髪の色に加えてボロボロのフードをかぶった女の子を背負っているせいで町に入ってから終始目線が痛かったが……

ちなみに、宿代は先ほどの甲冑野郎どもからの戦利品で難無くすんでいる。

「で、早速なんだがこれからどうしていこうかアル」

「そうですね、私もそうなのですが、まずは、マスターのステータスが安定なさるまではどうにも……」

この世界には人や生き物、さらには道具などの力量や職業などの適性力、それが持つ危険度を測るためにレベルやステータスというものを用いて測るのだそうだ。

これは、体内などに必ずあるといわれている魔力回路というものから測るらしく、現在俺とアルは生まれたばかりということでその魔力回路が不安定でレベルやステータスが測れないばかりか本来の力すら満足に出せない状態であるらしい。

「ん～なあ、アル。そもそも、精霊って何なの？」

「精霊というのは、私のような何らかの強い力を持った道具や生物が長い年月を経てその身に一定の純粋な魔力を宿した者、または力そのものが集まり意志を宿した者だと聞いています。また精霊は自分が司っている力の管理をし、その力が絶え間なく流れるよう世界の均衡を守る役目があります。そしてマスター、もとい精霊王様はそれら精霊達を取りまとめ時には見守り、時には罰していく我々の父であり母なのです」

「我々の父であり母なのです……っか。なんか、そう言われると俺なんかが精霊王になっちゃっていいのかな？　て、おもえてくるよ。現にさっきは、何もできずにアルに存在を消費してまで助けてもらっちゃっただけだし」

「マスター……大丈夫です。マスターならきっと素晴らしい精霊王様になられますよ」

こんな何のとりえもない俺でもアルは、俺のことを精霊王として認めてくれて、献身的に支えようとしてくれている。

「アルは優しいな」

「い、いえそんな」

アルのためにも立派な精霊王にならなくちゃな……。

「あ、そういえばさ、俺の前の、そのつまりは先王の精霊王はどうなったのさ。それか今までの精霊王は？　会えればこの世界のこととか、精霊のこととか色々詳しく教えてもらえそうだし、俺も少なくとも今よりはうまく精霊王としてやっていけそうなんだけど」

「先王も何も、今までそのような者は一人もいた記録はありませんよ。マスターが最初の精霊王様で

す」

「は？　どうゆうこと」

「私達にとって精霊王様というのは、マスターの世界でいう神々のようなものでして、伝承やおとぎ話でしか知り得なくその存在すらいるかどうか怪しいものでした。ですが、数年前、ちょうど私が生まれた時ぐらいでしょうか、ある人間の魔導師が私達精霊に精霊王がもうすぐ転生してやってくると予言し、そして私達精霊もまたその存在の波動を感じ取ったのです」

……驚愕の事実再びである。

……

「あ、マスター。予定よりかなりはやいですが私達のステータスが確定されようとしていますよ」

ちなみに、数年前に誕生したアルとさっき転生したばかりの俺がなぜ同じタイミングでステータス確定するのかというと。もともと精霊王というのはその存在の力の大きさゆえに成長が驚異的にはやいからだそうだ。そして、精霊王が成長する時に発する特殊な波長に当てられたアルもまた成長が驚異的に促進させられたらしい。

そうこうしているうちに、俺とアルの体が契約をした時みたいに強く光りだした。そしてさらに今度は体中に黒い入れ墨のような線が幾重にも体をめぐった。

「わ、いったいなんだい……

…大丈夫かい黒髪のお兄さん」

光と線が現れたのは、一瞬だったがなんとも言えない痺れが体中に駆け巡り思わず目の前の木製の長机に突っ伏してしまった。

「え、ええ。なんとか」

「今は、他の客が少ないからいいけどあんまり室内で魔法はやめとくれよ。ほれ、料理そこに置いとくからね」

気づけば、体中になんとも言えない不思議な力があるような感じがする。これが魔力ってやつなのか。何かふわふわする。体も軽い。

「はは、ありがとうございます。おばさ――おねえさん」

「ん、わかればよろしい」

やべぇ目が本気(マジ)だった。背すじに感じた寒気により何とか起き上がることができた。

「おや、そっちのフードのおちびちゃんも起きたようだね」

町に着いてから起こそうとしたが起きず。また、俺が離れようとすると寝苦しそうに唸るのでそばで寝かせて置いたのだ。よく見れば頬に涙の筋があったこともあり相当辛いことがあったのだとうかがえ、可哀そうに感じもうすこしぐらいは寝かしておいてもいいかなと考えたからでもある。

「う、ううん。」

「おはよう、って言っても今はもう夜だけどね」

「え、こ、ここは!?」

「取りあえず、座りなよ。ちょうど飯もあることだし一緒に食べながらはなそう」

「は、はい」

すると、少女は椅子ではなく地べたに座った。

「なにしてんのさ？　早く隣にきなよ。料理冷めちゃうよ」

「あの座っていいんですか。私なんかが隣に座って一緒に食事していいんですか」

「はあ、何いってんのさ、さっきからそう言ってるじゃん。ほらはやく、俺もう腹ペコなんだよ」

少女は、おそるおそると座り

目の前のシチューもどきをまじまじと見つめる。しかし、見つめるだけで食べようとはせずまだおろおろとこちらを見上げる。

（ん？　あぁ、なるほど首輪が邪魔なのか）

（マスター、彼女の首輪取ってあげたらどうです）

（ん、そうだな。……ってアル！？　へ、なにこれ）

（先ほどステータスが安定したことによって念話ができるようになったのです。契約している精霊とならどれほど離れていていても会話することができますよ）

（すげー。携帯要らずだな。っとそうだった首輪だな。ていってもあんなごつい首輪どうやって外せばいいんだ？）

（そのまま首輪に手を当て外れよと念を飛ばせばいいのです。ですが、折角ですので今回は私の力を披露しましょう。これからマスターに憑依します）

というやいなや、アルは光だし半透明になって俺と重なる。そして文字通り背後霊のように俺の後ろに憑依した。

（うを、なんだこれ。アル、青白い光の線が見えるようになたっぞ）

（はい、マスターそれこそ私の魔工精霊としての力、魔力観測です。首輪の中に見える青白い線のどれでもいいので切れろと念じながら指で切ってみてください）

いわれる通りに首輪の中に見える青白い線のうち一番太い線を指でなぞるようにしてみると、ぷつんといともたやすく線は切れた。そして、それと共に首輪が光の粒子となって消え去っていく。

「おどろいた、あんた精霊使いだったのかい。そのなりからただもんじゃないな、とは思っていたがまさか精霊使いだったとはね。しかもなんだい、実体化出来る上に人型の精霊なんてめったにお目にかかれないような高位の精霊じゃないか。さらに、完璧服従ときた、はぁ～たまげたもんだ。……それに、奴隷の首輪をはずしてやるなんて粋なことすねやるじゃないか。この～色男が」

「ちょ、やめてくださいよ」

アルの憑依を解き、指でつつきながらからかってくるおばちゃんをあしらいながら料理を一口食べる。お、想像以上に美味しい。

「照れるな照れるな、よかったね。おちびちゃん」

「ほら、君も早く食べなよ。美味しいぞ」

少女は、今起こったことが信じられないのか口をぽかんと開けたまま唖然として固まっている。

いつまでたっても動きそうにないのでその開いた口にシチューもどきをスプーンで掬って入れてやる。

「お、美味しい……。美味しいです」

「だろ」

「はい、ほんとに……美味しい……ふぐ、えぐ、……ずず……グズ」

「おいおい、泣くこたぁないだろうよ。ほら、旨いもん食ったときはうれしい顔しなきゃ、な？」

「はい」

ニコ

その後、泣きながら嬉しそうに、そして必死に料理をほおばる少女が落ち着くまで話し合いはせず食事をすることにした。遠い昔、星羅と一緒に食べた母さんのシチュウ―の味をおもいだした。

第四話　それぞれの事情

場所は変わって、今俺たちは宿の自分達の部屋の中にいる。

「と、それじゃ食事も済んだってことであらためて、はじめまして。俺の名前は、神崎優斗。あ、神崎の方がファミリーネームで名前の方が優斗ね。そっちの娘は仲間のアル。馬車の中で見つけた君をほっておけなかったもんで悪いけどここに勝手に運ばせてもらったよ。そうだ、君の名前は？」

「……名前」

またも、泣きだしそうになる少女。

「え、どうしたの？」

「いえ、またお父様とお母様から頂いたこの名を名乗れることができるなんて夢のようで――これもそれもユートさんとアルさんのおかげですね……私はクラン・クル・マルグリットといいます。助けてくださってありがとうございました。ユート

さんとアルさんは命の恩人です。それに奴隷の首輪まではずしてもらって、――どれだけ感謝してもしきれません……このご恩はかならずやこの命をもってしてでもおかえしします」

「命の恩人だなんて大げさな。お礼なんていいよ。俺はただ人として当たり前なことをしただけさ。あと、首輪の方もきにしなくていいよ、さっきの様子から奴隷っていうのは俺の想像している通りのことだろうからさ――俺、そういうの許せないたちなんだ。アルもそうだろ」

「はい、勿論でございます。マスター」

「でも、あのままだったら路頭で飢え死にして魔物か野生動物の餌になるか、どこかの変態に飼われて尊厳を踏みにじられながら生きるしかなかったところをユートさんは希望を与えてくれました。そんな方にお礼もしないだなんて――それになにより竜人（ドラグーン）としての私の誇りが許しません。どうか、私になにかさせてください、なんだったらこの体を使って――」

「ストップ、ストップ！　わかった、わかったから。いくら今ここに俺らしかいないからって脱ごうとしないで！！」

「わかりました」

「ふう～しかし、お礼か――ん～どうしようかな」

（マスター）

（ん、どしたアル）

（先ほどの、この世界の説明の話の続きなのですが。私、あとは精霊としての有る程度の常識と魔工のこと、それと少しだけの魔法に関する基礎知識しか知らないんです）

（と、いうと？）

（つまり、この先人として肉体を維持していかな

くてはならないマスターのこの世界での生活のサポートやアドバイスができないことになります）

（げ、マジかよ。今はまだ鎧野郎どもからもぎ取った金やらなんやらがあるからいいけど。こりゃ早めに職やらなんやらをどうにかしなければな――――あ、そうだ）

「なあ、クラン。君この世界のことくわしい？」

「この世界？　世界のことはわかりませんが生きていくすべとそれなりの常識はあるつもりですけど」

「それじゃあさ、これから俺らの仲間として一緒にいてくれないか？　そして、出来る限りでいいからさ俺達にアドバイスをしてくれよ。実は俺達、ある秘境からやってきた身でさ、色んな事をしらないんだ　アルもそれでいいだろ」

「無論マスターのご意思に反対などございません」

「あの、そんなことでいいんですか。いえ、というよりも私なんかがついて行っていいんですか？」

「もちろんさ。むしろこんなかわいい子と一緒にいられるんだから贅沢なぐらいだよ。だからこれからよろしく」

クランの顔を覗き込んでに微笑みかけてやる

「は、はい」

うん、やっぱり。かわいい子には笑顔がいちばんだな。

――顔が赤くなっているのがちょっと気になるけど。ほっとしたからかな

あと、アルなんでそこで睨む。俺なんかしたか？

「マルグリット……マルグリット……竜人（ドラグーン）のマル

グリット……あ！まさかおちびちゃん。あんたここからずっと北西にいった竜の国（ドラグシア）の第三王女のクラン・クル・マルグリットかい！！
――あ、布団ここにおいとくよ。」

「へ！？　は、え、いや。あっと、えっとその――」

「クランって王女様なの！」

て、いつのまにおばちゃんここに来たの！！というかどこから聞いてたの！？

「う～、は、はい。そうです」

「王女なのに奴隷？　どういうこと。あ、いや話しづらいことだったらべつに話さなくてもいいんだけど――」

「いえ、ユートさんとアルさんになら話してもいいんですが――長い話になりますよ？」

「いいよ、何より俺はクランのことが知りたいか

ら」

「わ、わかりました。じゃあ話しますね――今、竜の国(ドラグシア)と人間の国こと白の国(アマルル)が妖精(ティータニア)の国の魔石をめぐって争っていますよね」

「え、そうなのかい」

「な、なんのこと」

「そう、なのですか」

「……皆さん、知らないんですね」

「常識なの！？いや、そんな残念そうな目で見ないでよ」

「ここ森(ニリム)の国は他の国と少し離れたとこにあるか

らねえ。それに、こんな田舎の宿場町にそうそう新鮮な情報はこないよ」

「戦争ですか、力の変動が気になります。他の精霊たちは何か行動を起こしているのでしょうか。マスター、どう思います？」

「どうって、そんなこと聞かれてもな――て、あなたは、いつまでここにいるんですか！仕事はいいんですか？」

「あ？いいんだよ。何か今日客すくないから」

「えっと――と、とりあえず皆さん話続けていいですか」

「あ、ああ、すまないクラン。続けてくれ」

「で、その二国が戦争をしているんですが。私の国つまり竜の国（ドラグシア）では、戦時直前急に王族率いる穏便派と、宰相および上流貴族率いる強行派のいがみ合いをはじめてしまって内政は無茶苦茶になってしまったんです」

「それがクランが今ここにいるのと、どう関係が？」

「泥沼化する睨みあいの中、ある日痺れを切らした強行派がついに王族殲滅という愚行に走ったのです。ほとんどの貴族に根回しがいきわたっておりまた。また、私の腹違いの姉の一人である第二王女ジル・フェルゼ・マルグリットの裏切りもあって、私たち一族はなすすべなくただ淘汰されていくしかありませんでした。そんな中私の家族は、多くの犠牲を払いながらも命からがらなんとか国境近くまで逃げ切っていたのです」

クランの顔色が段々と暗くなっていき、かすかに体も小刻みに震えている。

「ですが、あと一歩で隣国の魔法（エルニカ）の国へと亡命できたというところで、何故かそこで待ち伏せしていた白の国（アマルル）の艦

隊と鉢合わせになってしまったのです。お父様とお母様は、その命尽きるまで必死に私と第一王女であるラウ・フェルゼ・マルグリットお姉さまと第一王子であるクルス・クル・マルグリットお兄様を守ってくださいました。しかし、その決死の抵抗も空しく私達三人は捕まりました。そこで、ラウお姉さまとクルスお兄様はせめて私だけはどうにかして逃がそうと二人で決心なされ、私の逃げ出す活路をつくりだそうとしてくださったのです」

その時のことを思い出したのかクランの頬には一滴の涙がつたっていた。

「最後に見たのはぐずりながら二人を止めようとする私に優しくそして仕方なさそうに微笑みかけてくれたラウお姉様とクルスお兄様の後ろ姿でした。私は、ただ逃げることしかできなかったんです。大切な人たちを見捨てて――それが、ここまで私を生かしてくれた人たちの思いにこたえる最後の方法だと信じて――――なのに、なのに私は結局捕まってしまって！！」

クランの泣きじゃくる姿をこれ以上見ていられなくなった俺は、その小さい体をそっと抱いた。

「あ――ぐす――すいません。また、見苦しい

姿を――見せちゃいました」

「いいんだ、クラン。俺たちはさっき結成したばかりだけどれっきとした仲間だ。仲間ってもんは嬉しいことも悲しいことも共に分かち合っていくもんだよ　そうだろ？　」

「はい」

「クランさん、これからは私とマスターがずっと一緒です。まだ会って間もない私達ですが存分に頼ってください」

「アルさん――お二人ともありがとうございます」

「あんたら、いいやつだねぇ。おばちゃん感動しちゃったよ。やっぱり精霊使いの貴族様ってなるとそこらへんの冒険者とは器の大きさが違うねぇ」

――この人結局、最後まで一緒に聞いてたのかよ。

つか、今自分でおばちゃんって……

「あの、俺別に貴族なんかじゃないんですけど」

「何言ってんだい、そんな上等な服身につけて。そんなのよっぽど高貴な人しかきれないよ」

たしかに、見た限りこの世界の生活水準は、RPG風らしく中世ヨーロッパぐらいの水準みたいだから、俺の今着ている詰襟の学ランはかなり周りから浮いている。

そういえば、なんで転生したっていうのに俺は学ランをきているんだろ？　いや、生れたまんまの姿であんな街道沿いの森の中にほうりだされていてもこまるんだけどさ……。

「この服は、そのちょっとわけありでして。えっと自分でもなんで着ているのかわんないっていうか。なんていう

か。ははは」

「はあ？どういうことだい」

「とにかく、俺は貴族何かとは違いますよ」

「そうです。マスターは貴族なんかじゃなくて精霊王様なんですから」

「は！？」「え！？」「ちょ！？」

何いってんのこの子！！　それはいっちゃだめでしょ。仮にも俺、精霊（きみら）達の神様なんでしょ！？　クランはともかくおばちゃんの前でそれ言っちゃまずいでしょ。

「信じられないけど。嘘がつけない精霊がいうんだからほんとうなんだろうねぇ」

「あの、えっと私。ユートさんが精霊王様とも知らずなれなれしく触ってしまって――えっと、そのすみません」

ほら、二人とも混乱してる。

（アル）

（なんでしょう、マスター）

（力のある精霊とかがどういった扱いをされているのかもっとよく考えような　俺、伝説上の生き物なんだしさ　）

（？　はい、マスター）

「二人とも落ち着いて、あとクランはそんなに畏まらなくていいから」

「は、はい」

顔がこわばっているぞ、クラン……。

「それにしても、なんで精霊王なんてのがこんなところに。まさか、ちかじか何か良くないことでも起きるのかい」

「いえ、それは俺にもわかんないんですけど。俺がいるのは気まぐれみたいなものだとおもってください。　あと、クランと俺のことは内密に」

「任しときな、わたしゃここらへんで一番口が堅いって有名だからさ。ホントだよ」

本当に大丈夫なのか。俺の勝手なイメージじゃこの人ついうっかりそこらへんで喋ってしまいそうなんだが……。

その後、おばちゃんは部屋から出ていき。俺達も今日はもう疲れたということで、今後のことは明日になってから話そうということになった。

それぞれ床に就くと、すぐに二人のかわいい寝息が聞こえてきた。

俺も色々あったからか布団に入ったとたんに眠気が襲ってきて深い眠りに落ちた。

第五話　異世界での日常

ん、ん～ま、眩しい。もう少し眠っていたい。

なぜかいつもよりベッドがふかふかしているので、起き上がる気力が微塵も出ない。

それにこの抱き枕、むにむにと不思議な感触がして気持ちいい。

……こんなん俺持ってたっけ？　どっちにしても布団からでたくねぇ。

そういえば、昨日俺なにしてたんだろ。

ん～何だか色んな事があった気がする。

あ～そういえば可愛い子と出会ったような。

ゴソゴソ

ん、何か布団の中がもぞもぞする！

せっかくの安眠を阻害するものを確認すべく目を開けてみると、視界は空色一色に染まっていた。

「そうそう、こんな感じの綺麗な色の髪の毛と瞳を持った子が俺を助け――――て、はぁ！？」

コレはナンデスカ。

そっと体を起こし布団の中を覗き込むとすやすやと寝息を立てながら俺に抱きついている全裸のアルがそこにいた。

あ～思い出した。昨日はアルとクランと打ち解けあった後もう遅いからって寝たんだった――――って、どうしたらそこからこの状況に繋がる！

ま、まさか寝ている間にあんなことやそんなことをし、知らず知らず――いやいやいや、まぁまて俺よ、それはない。断じてない。あってはならない。ふおおお、おさまれ我がリビドーよ。

そうだ、何より俺の服や布団が乱れていない。もし何か――ナニかが起きたとしたならば、これは絶対にあり得ない。……俺の心の中は超絶に乱れ荒れ狂っているがな！

……それにしてもこの子ほんっと可愛いな。肌も真っ白ですべすべだし、なにより小さい体のくせにでるところはしっかりとでて――

「うんぁ――――――――あ、マスターおはようございます」

「お、おお、おはよう――じゃ、なくて、なんで俺の布団の中に入ってるんだ！服は、服はどうした」

「脱ぎました」

「脱ぎました。じゃねーよどうして脱いでんだよ！！」

「昨日私、マスターに憑依して精霊としての力を行使しましたよね」

「したな」

「あの憑依には、魔力とは別の精霊だけが持つ特殊な力を使うんです。魔法なら空気中に漂っているエーテルを特殊な呼吸をしたり、食事をして物質に宿っているエーテル自体を取り込んだりして回復すればいいんですけど。この力を回復させるにはマスターからある一定の範囲にいなければならないんです」

「だからって裸で抱きつかなくても」

「いえ、このほうがいいのです。先ほどの回復方法ですが回復率を上げるにはマスターと近ければ近いほどいいのです」

「さいですか」

頑としてゆるぎないアルの目つきに押し負けた俺は、アルのいうとおりにするしかないようだ。

「ふあぁ、あ、ユートさんアルさんおはようございま――はぅ、あ、あああの、あのあの、ごめんなさい、ごめんなさい。み、見るつもりはなかったっていうか、私も昨日は必死だったからあんなことといちゃったけどそういった経験がないから、こういったこと

の免疫がないっていうか、お二人の間柄だったら当然っていうか、えっと。ご、ごゆっくり！！」

クランが顔を真っ赤にして、勢いよく部屋から飛び出して行った。

あれは絶対に、確実に、猛烈に誤解している。むしろしていない方がおかしいといってもよい。

いや、うん。なんだろうこの気持ち。なんていうかこう家に帰ったら自分の秘蔵コレクションが綺麗に本棚へと整頓されているのを発見した時のように空しい。とにかく空しい。限りなく空しい。

「なあ、アル。」

「何でしょうかマスター」

「その精霊の不思議パワーはもう充電出来たのか」

「はい、先ほど。今ならいつでも出撃できますよ」

「そうか……じゃあとりあえず服着ような」

「了解しました」

昨日できた俺とクランとの信頼関係が早くも崩れかけています。

あの後、どこで聞きつけたのか出会ったとたんに、からかってきたおばちゃんの精神攻撃を受け流しながらも何とかクランの誤解を解くことができた。

くそ、あのおばちゃんのニマニマした顔がウザすぎていまも頭の中をよぎる。

しかし、これでやっと心置きなく朝食にありつける

「あの、すみません。私、へんに早とちりしちゃって。そうですよね。ユートさんはそんなことする人には見えませんもの。あ、いや優しそうって意味ですよ」

それは、見るからに俺がへたれってことか、クラン。

「いいよ、あの状況じゃそう勘違いしてもしかたないしね」

「あの、マスター。マスターさえよければ私に、夜のご奉仕のほうも任せていてだきたいのですけど」

「ははは、朝っぱらから真顔で何いってんだろうねこの娘は」

「そ、それは、私には全くもって欲情などしないのでおとといい行きやがれ！と、いうことですか」

とたんに、目を伏せて寂しそうにするアル。

く、なんだこの異常なまでの可愛さは。

「そんなことはない、アルは十分魅力的だって、って何を言わせるんだ恥ずかしい。さっきも言ったけど俺は、別に君らにそんなことを求めてなんかいないの！あ～もう、この話はなし、終わ

り。もう終わり。」

はあ、なんで俺、朝っぱらからこんなにも疲れてんだろ。

……く、朝飯が冷めてやがる。

「とにかく、そんなくだらない話よりも今後のことをきちんと話しあうべきだろ。俺としては朝飯をくってからは何よりもまず俺達の服装をそろえたいと思っているんだが。このままじゃ三人とも何をするにも目立ちすぎて動きづらいだろうしさ。あと俺達は、この町にずっと居座るわけにはいかないんだ。俺には精霊王として世界を見て回らなければならない義務があるらしいから」

俺は帰る方法もできれば探したいしな。

ちなみに、服装で言うと今アルは、昨日出会った時と同じ白と青を基調としたフィギュアスケート選手が着ていそうな、少し豪華そうなビスチェ風のレオタードとミニスカートを着ている。

なんでも、精霊の正装らしく自らの魔力でできているそうだ。

「え、でもユートさん、私お金持ってないですよ」

「大丈夫、いくらかは手持ちがあるからそこは安心していいよ」

この世界は金貨、銀貨、銅貨という三種類の共通通貨で一般的に取引されている。

三つの通貨の価値はだいたい金貨１枚＝銀貨１０枚＝銅貨１００枚といった感じだ

ちなみに、ここの宿屋の一人分の宿泊代は一泊二日食事なしで銅貨３０枚である。食事はだいたい一食銅貨３枚くらいだ。

そして、２０日分の三人の宿代をすでに払っている現在の俺達の手持ち金は、それでもなお金貨８枚と銀貨１枚さらに銅貨９１枚とかなりある。

「そんな、それじゃあ私恩を返すどころかまた、お二人に迷惑かけちゃうじゃないですか」

「これは、俺達からの気持ちだと思って何も言わず受け取ってくれればいいんだよ。あとそれじゃあ俺の目のやり場に困る。クランはかわいい女の子なんだからさ、他の野郎どもがいやらしい目でクランを終始見てくるっての何か腹立つし」

クランの服装は奴隷だったせいか、かなり薄手なぼろぼろのワンピースみたいな服とフードのみである。

「はう」

自分の今のかっこを思い出したのか赤面するクラン。

「それにちゃんとした装備をしなかったことで旅に支障をきたした、なんてことがあったらそれこそ問題だしさ」

「それは、そうですけど。う、う～ぅわかりました。それじゃあその分旅の道中での食事などで頑張らせて頂きます。家事には結構自信あるんですよ私」

「それは、頼もしいな。なあアル」

「はい、マスター。私も今まで料理などをしたことがなく、どうしようかと思っていたところでしたので丁度よかったです。」

「今まで料理をしてこなかったって……アルさん、それじゃあ一体どうやって食事をしていたんですか」

「できなくはないんですが、一般的に精霊は食事ということでエネルギーを摂取しないんです。そもそもが力の象徴を具現化したようなものですからその存在を維持するたに魔力を貯めこんでおけば事足りますので」

「なるほど」

「それにしても、これだけ金をじゃらじゃら持ち歩いているとさすがに邪魔になるな。あと金貨と銀貨が非常に取り出しにくい」

「普段、生活用品や小物などを買うときはだいたい銅貨20枚程でことたりますからね……まとめ買いするにしても銀貨数枚で取引しますし。これだけの大金を常に持ち歩いているのは冒険者ぐらいですね。――そうだ！ユートさん職を見つけたいと言ってましたよね。冒険者になられてはどうですか」

冒険者。なにそのすてきな響き。

「冒険者ってのはあれだよね、町の困ったこととか、魔物退治とか、はたまた未開のダンジョンとかの調査やクエストをするあの冒険者だよね」

「なんだ、知ってたんですねユートさん。はい、そうです概ねその通りです、その冒険者です。さっきここの宿の主人から聞いたんですけど、丁度この宿場町にも冒険者ギルドがあるみたいなんで、服を買ってからでもいいんで行ってみたらどうでしょう」

「いくいく、絶対行く！」

ギルドまであるのか。さすが“ザ・見るからにファンジー世界”。なんか、俄然やる気が出てきた！

「おお、マスターのテンションがいつになく高い」

「すごい喜びようですねユートさん」

「だって、冒険者だぜ？　あっちの世界でなら男だったら誰もが一度は憧れる未知の大冒険を、仕事としてできるんだ。胸が高鳴らずしてどうしますか」

「あっちの世界？」

「ああ、そのことについてはまた今度話すよクラン。そんなことよりも早くこれ食っちまって買い物にいこうぜ。そして、次は冒険者ギルドだ」

服屋は宿屋を出て数１０メートル先の広場にあった。

この広場にはギルドらしき建物を中央に、それを取り囲むように色々な店が建ち並んでいる。

店に入ると店内には想像以上の商品が所狭しとおいてあった。

確かに、こんな深い森に囲まれ街道沿いにぽつんとある宿場町にしたら不釣り合いな大きさの店舗だなとは思っていたがまさか陳列数まで店内がこんなにも狭く感じさせられるほどとは。

「すごいですマスター。衣服の山が出来ています」

「ああ、凄まじいな、アル。この世界の衣服屋はどこもこんなにも凄まじいものなのか。どうなんだ？　クラン」

「いえ、ここの国以外だったら、そう簡単にここまで立派なお店は見つからないと思いますよ。これはこの森の国ゆえの特色です。ほら、森の国っていうぐらいだから文字通り木や植物などの資源とそれにともなう牧畜による様々な素材が豊富なんですよこの国。だから森の国は昔から衣服などの文化も栄えていたんです」

「なるほどな、だからこんにも大量に」

まぁそれにしても向こうの住人である俺からしたらかなり異様な光景なんだがな。まるで某眼鏡の魔法使いの少年が活躍する映画の店みたいだ。

「私も知識では知っていたのですが、今まで森の国の服を手にしたことは無かって。だから、一度着てみたいな～と思っていたんですよ」

俺達がその陳列数に驚きなが喋っていると、売り子らし

き赤髪のポニーテールの女性がすかさずやってきた。

「いらっしゃいませ、あら、見ない顔ですね。今日はどういったものをお探しで？」

「俺達三人の衣服が欲しいんです。なるべく冒険がしやすいのが良いんですけど。オススメとかってあります？」

「冒険？貴族様がまたいったいどうして」

「あの俺達は別に貴族とかじゃないんですよ」

「あら、それは失礼した。冒険に適した服ですか。それでしてら、こんなものはいかがでしょうか」

いつのまにか商品を何着か持ってきている売り子のお姉さん。

何という早業！！　ふと後ろを振り返ると、気づかぬうちに赤髪のお姉さん以外の売り子さんも2，3人やってきていて、アルとクランを取り囲んでいる。

「キャー何この白ふわの可愛い生き物。思わず抱きしめたくなるわー」

言ってるそばからクランを抱きしめている青髪のグラマラスなお姉さん。

「あの、ちょ、く……くるし」

ぬおお、クランめ。う、うらやまし――じゃなくて、何とけしからん！

「こっちの子もお人形さんみたいに可愛い。それにこんな髪色はじめてみた。見る角度によってこんなにも色が変わる！まるでお空のようだわ。ねえ、あなたこの髪どうなってるの？」

「すみません生れつきでして私にもよくわからないんです」

「いや～ん、話し方もクールでキュート」

「ちょっとちょっと、私にもお喋りさせてよ、貴方だけずるいわ。あ、そうだわ丁度とびっきりの貴方に似合う可愛い服があるの」

アルはアルで緑髪のお姉さんと薄紫髪のお姉さんによって着せ替え人形にされている。

「さあさあ、試着室はあちらです」

二人の弄ばれっぷりに苦笑いしている俺をぐいぐいと試着室へと押し込もうとする赤髪のお姉さん。

そして、その手に握られている服がいつの間にやらまた増えている。――ん？

「あの、店員さん。それもしかしてスカートですか、いや、もしかしなくてもスカートですよね。つか、どう見てもスカートだよこれ！！」

というか、よく見れば彼女が持っているもの全部女性ものだ。いや、よく見なくっても全部女性だよこれ

「そうですけど、なにか問題が？」

「問題しかありませんよ。なんで全部女性ものなんですか、俺男なんですけど」

「またまた、ご冗談を。こんなかわいい子が男の子なはずないじゃないですか」

「ご冗談でも何でもなく、俺は男です！！」

たしかに、俺は同年代の高校生の平均より少し、少〜し背が低いがれっきとした日本男児だ！

くそ、まさか異世界にまで来てこのネタでいじられようとは。鬱だ。このことに関してはいつもなぜか人と出会うたびにこのネタでいじられる。いったいどこをどう見たら俺を女に見間違うのか、いまだに皆目見当がつかん。

「ふふ、ジョークがお好きな可愛い貴族様だこと」

貴族じゃないってことも信じてなかったんですね……。

そのあと、予想以上に時間が買ってしまったがなんとか全員それぞれ満足のいく買い物をすることができた。

今、クランはクリーム色のボディスと紺のアンダースカートを、アルは深い青と白が特徴的なダブリエをそれぞれ着ている。ちなみに俺はTシャツもどきとジーパンもどきの上下にポケットがいっぱいついているトレンチコートを羽織っている。

「ふう、なんだか疲れたな――あ、そうだまだ言ってなかった、二人ともそれすごく似合ってる。とっても可愛いよ」

「はう」　「……ふしゅー」

おお、二人ともあまりの店員さんのアグレッシブなプッシュにだいぶ疲れているようで顔が赤い。アルなんて茹でダコのようになっている。てか、アル……お前蒸気出てるぞ。

「そうやってマスターは……突拍子もなく……か、かわいいだなんて」

「そ、そうです、ずるいですユートさんは」

「ずるいですって、俺は見たまんまの事をいっただけなんだが。なにかいけなかったか」

「く、もういいですマスター。なんでもありません」

「はあ、ああやってどれほどの女性があの笑顔に食われてきたんでしょうかアルさん」

ふたりで何かブツブツと話し合っているようだが全く聞こえん。俺が何をしたというのか。

まあ、いいやそれよりもギルドだ。ギルド。

第六話　話題の人

「いらっしゃいませ。本日は森の国（ニリム）極東総合支部メロナのギルドにようこそ」

ついに、ついに俺はギルドに来てしまった！！ふおおーなんかもうこのいかにもな雰囲気をこの目で実際に見られただけでも謎の感動がわき上がってくる。

あ、あの壁にいっぱい貼り付けてあるのはもしやクエスト！？　すげーあっちに宿屋とは比べ物にならなくらいの立派な酒場がある。

やべーあのごついマッチョの装備かっけー。おお、あっ

ちには黒ずくめのとんがり帽子の魔女っ子が。あああ！！い、いまエルフとドワーフのパーティーがそっちに。な、なにーあ、アマゾネスだと、色っぺー。

「あの、どうかなさいましたか」

「マスター、マスター」

はっ、余りにもテンションが上がりすぎて周りが見えなくなっていた。アルが現実に連れ戻してくれなかったらどうなっていたことやら。

「すみません、ギルドに来るのが初めてなものでつい」

「そうでしたか。では改めて。いらっしゃいませ本日は当ギルドへどういったご依頼でしょう」

「新しくギルド登録をしたいんですけど」

「登録？　あの失礼ですがお探しのギルドをお間違えではありませんか。ここは冒険者ギルドの受付カウンターですよ、生産系の裁縫師ギルドや料理人ギルドの受付カウンターは三階なのですが」

この極東総合支部メロナのギルドは木造の四階建てだ

一階は職人系の鍛冶屋ギルドや魔導具（マジックアイテム）ギルド、または商人ギルドなどがあり二階は冒険者ギルドと魔術師ギルドがある。ま

た二階には、銀行や魔物の部位をお金と両替出来る取引所がある。

そして、三階は先ほど受付のエルフの水色ショートのお姉さんがいっていた通り裁縫師ギルドや料理人ギルドなどの生産系のギルドがあり。また、三階と二階には吹き抜けのテラス付き酒場までもがある。

なぜこんなにも立派な酒場がギルド内にあるのかというと。なんでも、依頼における情報収集をやりやすくするためのはからいなのと。料理人ギルドで考え出された魔物の部位を使って考えられた料理を試食として出しているからなのだそうだ。

ちなみに、四階は倉庫兼ギルド職員の作業部屋だ。

「ええ、間違いありません。俺たちがしたいのは冒険者ギルドの新規登録です。あの、俺達になにか？」

「いえ、あまりにも皆さんが軽装備でしたので」

確かに俺たちの今のかっこは、冒険者にしたらあまりにも何も持っていなさすぎるな。

魔術師だって何かしらの装備をして自分を守るだろうに。そもそも、冒険者になろうとしているのに冒険をするためには必需品となってくる様々な野営道具やカンテラなどの道具を俺達は何も持っていない。

「諸々の装備や道具はギルド登録あとでしようと思っていたので――冒険者をなめすぎてますかね俺達」

「そんなことはないと思いますよ。さすがにそのままの格好で魔物と戦いに行く、なんて無茶言われたら私共も全力でお客様

がたを止めにかかりますけど。冒険者の仕事は何もダンジョンの探検やモンスターの討伐ばかりじゃありませんからね。雑務系のクエストだって立派な冒険者の仕事ですから。むしろ、ギルドからしたらそういった雑務系の仕事を多くこなしてくれる冒険者の方がありがたいぐらいですし」

なるほど、市役所的立場のギルドからしたら町の人々の声に応えてくれる方がいいってわけね。

「あ、すみませんついつい長話しちゃって。冒険者ギルドの登録でしたね。はい、ではまずはギルドについてご説明しますね。ご存じの通りギルドには商人ギルドや冒険者ギルドなどの１３種のギルドで構成されています。これらのギルドにはいずれも、ランクがあり、始まりはＦ－次がＦ、そしてＦ＋という風にランクが上がっていきます。ランクはＦ－からＳＳＳまでの２１段階です。ランクは、任務の失敗率を下げるためにつくられたのとその方がどのくらいの力量を持っているのかという目安を図るために作られたものです。クエストを受ける方は自分と同じランクかそれよりも二つ下のランクしか受けられません。ちなみに、Ｆ－ランクからＤ－ランクまでが初級者。Ｄランクから Ｂランクが中堅。Ｂ＋ランクからＳＳＳランクまでが上級者です。依頼には期限のあるものとないものがあり期限までにできなかった場合、報酬の二倍を払っていただきます。また、報酬はギルドが仲介料として５％引いたものとなりますのでご了承を。ギルドを通さなくても依頼は受けられますが、トラブルがあった場合ギルドの後ろ盾がないので依頼はギルドを通し

たものの方が安全です。とりあえず、ここまでで、質問はありますか？」

「一度に複数のクエストを受けることはできないんですか？」

「できなくはないですけどあまりお勧めはしませんね。クエストの失敗はそのままギルドの尊厳を傷つける事に繋がりますから。逆に優秀な方ですと依頼者の方からご指名がくる場合もありますよ。ああ、それとCランク以上の方からはその方の宣伝も兼ねて二つ名がつくことになります。他には？」

「ランクアップの条件とかってどうなっているんですか？」

「ランクアップは各ランクによってその条件が異なってくるんですけど。そうですねぇ、F―ランクからFランクですと地道な道のりでクエストの一万件の達成か可能性を信じてランクに似合う大きな偉業を達成するってとこですかね」

おおう。ギルドランクを極めるということはなんとまあ、厳しい道のりなんでしょうか。

つかそうなると、ＳＳＳランクってのはどんだけすげー奴らなんだ。

「説明を続けますね。ギルドは、ほぼ全ての国にあり。また、そのいずれのギルドもどの国家にも所属していません。なぜならギルドの主体がそれぞれの分野のエキスパートたち同士の世界的な情報交換をより早く、より正確に、より親密にし、それぞれの発展を志すものだからです。各国はその恩恵から得られる国の発展を無視できないということもあるのでギルドには基本様々な意味で手出しできません。まあ、つまりは見知らぬ土地で困ったことがあったらまずはギルドに駆け込めって事ですね。またこれらは、ギルドが保有しているオーパーツである“メタトロンの瞳”によりできる各ギルド同士の正確な情報交換と全ギルド登録者のデータ管理及びその者のステータス観測、そして銀行の運営により可能となることなのです」

なるほどなぁ。上手く出来てるもんだ。今後ともにギルドには目一杯お世話になりそうだ。

「ギルドについてご理解なさいましたか」

「はい、そりゃもう。二人は何か聞きたいこととかはあるか」

「いえ、とくには」

「私もないです」

「では、次はこちらにお名前をご記入してください」

受付の水色ショートのエルフのお姉さんが差し出してきたのは鉄製のクレジットカードのようなものだった。

（名前……漢字でいいのだろうか。そういえば俺、なんでここの人たちの言葉通じるようになったんだろ）

（それは私が、マスターと私に契約により魂同士に繋がれた精神のパスからマスターの前の世界の記憶を解析しこの世界の言語と照らし合わせているからです）

（ふーん、――って念話！　あれ、今のもしかして念話にしちゃってたのか）

（ええ、そうですよマスター）

ん～念話って便利だけどかなり難しいな、下手したら周りに俺の考えていることだだもれになる。

言葉で思い出したけど昨日のあの鎧野郎どもってアレ、仕方なかったとはいえ俺が原因で殺してしまったようなもんだよな……なんつーか、結果的にクランを助け出すこともできたし後悔とかはないけど――やっぱり命を奪うっていうのは後味が悪いな。通り魔に殺されたとはいえ俺が今まであの平和過ぎた日本でずっと暮らしてきたから命のやりとりをするって感覚がない、ってのもあるのだろうけど――

でもこの先そういった事は魔物とかがいる限り日常茶飯事なことになってくるし。あぁもう、くそ、モヤモヤするな。

「どうかしたんですか？　ユートさん」

「ああ、いやその。字が書けないんだ。以前俺のいたところの文字なら書けるんだが」

「そんなことなら私にお任せください。代わりに書かせて頂きます。――えーと、ユート、カ・ミ・サ・カっと。はい、できましたよユートさん」

やはりクランにとっては辛いことだからなのか馬車から助け出した時の事はクラン自身が何も聞いてこないから話してない。けど、俺達の前に鎧野郎どもと戦ってた角付きの人たちのこともあるしそのことについても後でじっくり話合う必要がありそうだな。

「ありがとうな、クラン助かったよ」

「あ、ちょ、頭撫でないでくださいよ、子供じゃないんだからは、恥ずかしいじゃないですか」

顔を真っ赤にして恥ずかしがっているようだがどことなく嬉しそうだ。クランが年相応の子供らしい反応をしてくれると俺としても嬉しい。

「はい、ユート・カミサカさんに、アルス・X・マキナさんに、クラン・クル・マルグリットさんですね。確かに登録しました。では最後に皆さんのステータスを測定しますのでこちらに来てください」

水色ショートの受付のエルフのお姉さんに連れられて小さく区切られた教会の懺悔室のような所に入るとそこには俺の顔とほぼ同じくらいの大きさの水晶が部屋の中で浮いていた。

これがさっき言っていた“メタトロンの瞳”ってやつか。

「では、こちらの水晶に順番に皆さんの血を一滴ずつ垂らしてください」

血を垂らすとさっき書いたそれぞれのカードと水晶がひかりだした。

「はい、これにて冒険者ギルドの登録を終わらせていただきます。お疲れさまでした。そちらのカードはこれからの皆さんのギルドカードとなりますのでくれぐれもお無くしなさらないようにしてください。あ、それとカードと共に皆さんの銀行の口座も同時作成されていますので。今からご利用できますよ」

やった。これで俺も今日から冒険者だ！

「マスターマスター、ギルドカードにステータスが浮かび上がってます」

「おお、ほんとだ。なになに」

ユート・カミサカ

年齢：17歳
性別：男
筋力：D
頑丈：B
体力：D
俊敏：B
精神：－E
器用：－E
知力：C
魔力：A
魅力：＋B
運勢：C
存在：EX
職業：精霊王

加護：　魔工の目
所持魔法属性：　無
装備：　旅人の服
所持金：　６，４４１Ｇ
レベル：　１

「くっそ～Ａ以上は魔力のＡと存在のＥＸだけか、アルとクランはどうだった」

「私はＡ以上は知力のＡ一個しかありませんでした」

アルス・Ｘ・マキナ

年齢：５歳
性別：女
筋力：　Ｅ
頑丈：　－Ｅ
体力：　－Ｃ
俊敏：　Ｃ
精神：　Ｃ
器用：　－Ｆ

知力：　Ａ
魔力：　－Ｄ
魅力：　＋Ｃ
運勢：　Ｂ
存在：　＋Ｂ
職業：　魔工を司る者
加護：　精霊王の加護
所持魔法属性：火　水　土　木　風　光　闇　氷　雷
魔工

装備：　旅人のドレス
所持金：　０Ｇ
レベル：　１

「は！？ちょ、ええ！！二人ともほんとですか。っていうかそんなこと、そんな大声でいったりなんかしたら。あわわわわ」

「お、おちつけ、どうしたって言うんだクラン」

クランの顔色はみるみる青ざめていく

「いいですかユートさん。ステータスっていうのはＦ－からＥＸ＋まである全２３段階で表されます。そしてだいたいＦで一般の子供くらい、Ｅで一般成人、Ｃで一流、Ｂで伝説、Ａで神族入りという風に言われています。そしてユートさんがＥＸである存在のステータスなんですけど。魔法は行使し続けると世界のもとに戻ろうとする修勢力による反動により行使者自身に絶対に負荷がかかるものなんです。そしてその魔力反動の負荷によるダメージの度合いを測るのが存在です。存在のステータスは、どんな精霊や神の加護を受けている人でも、いえ例え精霊自身や神族であってとしてもたいていの者はＡ以上いかないものなんです」

「そ、それで」

「それでですね、存在：ＥＸだなんて前代未聞のことを、冒険者を筆頭に様々な人が入り乱れるギルドのしかも酒場に近いこんな場所でいったりしたら……ね。」

気づけばあんなに騒がしかった周りが静まり返っていた。

周りを見渡せば皆凍結したかのように固まってこちらを様々な目線で凝視している。受付の水色ショートのエルフのお姉さんもカウンターに帰る途中で固まっている。

「おい、聞いたかさっきの、存在：ＥＸって」

「ま、まさかそんな、ありえねーって、何かの聞き間違いだろ」

「いや、でも他の奴らも聞いたみたいだし。それに、俺達人狼の耳の良さはお前もよく知っているだろう」

「それじゃあなにか、“メタトロンの瞳”がぶっ壊れたっていうのか」

「バカかおめーは、それこそ絶対にありえねーだろうがあれは伝説級のオーパーツだぞ」

「そ、そうだけどよう」

「ねね、そこの受付さんぼーっとしてるぐらいなら、あの子達のステータスのデータ確認してきたら」

「え!?あ。はい、直ちに確認してきます」

「ねえホセ爺どう思う。もしあの珍しい黒髪黒目のキュートな坊や達のステータスが水晶の故障や聞き間違いじゃなかったらとっても面白いと思わない」

「ふん、そんなこと。どうだっていいわい。たとえあの小

僧共が凄かろうとワシらには関係のない事じゃろうが」

「そうだけどー。もう、つれないなぁホセ爺は。ねェ～ルルセ、ホセが冷たいィ」

「あらあら、まあまあメルったら、あの坊やに興味があるの」

「もう、ルルセェ～」

「すん、すん。ジャームぅ、なんだかメルヘンな匂いがあっちの方からするよ～」

「ほんとだわぁ、マッシぃ、カラミテぃな臭いがそっちからする～」

「おい、ザン、今すぐあの不思議黒色生物を捕まえてきな

さい。ジョージ、解体の準備を早く。ホサラあなたは、……そのままつっ立てなさい」

「オケー、リリス任せときな」　「わかっだ。俺ここ動かない」

「ちょちょちょ、まった、まったお嬢」

「なによザン、まさか、あなたこの私の命令を聞けないっていうの」

「そのまさかさ、いいかいお嬢。いつも言ってるようだけど興味があるからってそう何でもかんでも解体しようとしないで、――まて、ジョージどこに行く気だ。わわわ、お嬢なに出してんだよ」

「特大メス」

「とりあえず落ち着こう、ね。ほら深呼吸、はいスースーハー」

「どきなさい、ザンさもなくばあなたもみじん切りにするわよ」

「落ち着こう、ほんとマジで落ち着いて。また、町に滞在できなくなるから。な、だからお嬢。落ち着いて、落ち着いてください」

おいおいおい、なんだよ。なんだか至るところから色んな事聞こえてくんぞ！！

と、とりあえずここはあれだ、うん。

「クラン！　アル！」

「はい、ユートさん！」　「マスター？」

「戦略的撤退ぃー！！」

第七話　道中問答（前書き）

この小説を読んでくださっている皆様がたのおかげでこの都度ＰＶ一万人越え＆ユニーク二千人越えを果たすことができました。誠にありがとうございます。この気持ちを胸にさらなる精進をいたしますので、これからもぜひともよろしくお願いします。

第七話　道中問答

ここ宿場町メロナは、ギルドがある大きな町であるにもかかわらず、その国の気質が世界でも最も温厚的であるといわれている森の国（ニリム）の最も東にある宿場町ということもあって、常日頃から皆を惹きつけるような目新しい物事やニュースはありもしないし入っても来ない。

なので、普段の宿場町メロナは寂れてこそいないが別段賑わってもいないのどかな森に囲まれた宿場町だ。

ところが、そんな東の最果ての宿場町であるメロナが、現在多くの人々で大いに賑わっている。それは、もう過去に例を見ない程の賑わいようだ。

当然、数少ない町の宿屋は、その良し悪しを問わずしてすでに満杯であり、また予約までも当分は空きがない程まで埋まっている。挙げ句の果てには町の周囲に野営を始める商人や冒険者などまで出始めた。

町は常にお祭り騒ぎで、ここが鬱蒼と茂る森の中にぽつんとある宿場町であることを忘れさせられる。

しかし、なぜこんなにもかつてない程までにこの宿場町が賑わっているのだろうか。

それには、二つの理由がある。二つともビックでなおかつ嬉しい事だ。特に冒険者と学者にとってはこれ以上ないほどといっていいだろう。

まず一つ目は、今まで一部の古文書にある記述と、精霊が皆信仰しているという事だけによりその存在がいるかもしれないと、考えられていた精霊王がこの町にやってきているからである。

そもそも、精霊自体がめったに人前に姿を現さない存在である。人型で実体化ができさらに何かを司っている精霊などとなれば、なおさら出会えるようなものでない。

だが、そんな出会えるかもわからない精霊を多くの人々は追い求める。それこそ一生を使い果たそうというぐらいに。なぜそのような途方もない事をするのか。それは、ひとえにそれほどまでしてでも精霊の加護を得る価値があるからである。

この世界にもしっかりとした国や法がある。しかし、それでもなお最後には自分の強さが、力がものをいうのがこの世界だ。なぜなら、常にここの世界の人々は魔物や魔獣による人の力ではどうにもならない者達との生存競争を強いられているからだ。

力がなければ、いざというとき自分の大切なものが守れないのだ。ゆえに、人々は精霊を追い求める。

そして、その力そのものである精霊の頂点に立つ精霊王が見つかったのだ。

これはもう合わずにはいられないだろう。

それこそ、加護がもらえずとも会うだけでなにかしらの恩恵がもらえそうな響きが精霊王という名にはある。

ただ、その精霊王の姿はどういったものなのか公には知られていない。

なぜならギルドが世界の大混乱を危惧して情報を操作し秘匿しようとしたからである。もっとも、うまく隠せたかどうかは今のメロナの町を見ればわかるだろうが……。

さて、ではもう一つの理由について話そう。

こちらも精霊王同様にずっと探されていたものだ。

ダンジョンである。

宿場町メロナからさらに東に進んだ“静寂の森”と呼ばれる森の奥地で巨大な遺跡が見つかったのだ。

無論、この世界において遺跡やダンジョンと呼ばれるものはそれほど珍しいものではい。それこそギルドが管理している物となれば星の数ほどある。

では、なぜそんなにも皆が色めき立っているのか。

それは、現在存在が確認されている大半のそういったものはすでに踏破され隅々まで探索し尽くされているからである。なので、新しく発見されたものというのはそれだけで皆を惹きつける。

さらに、今回発見されたものはこれまで多くの学者達が探し求めていたいまだ謎多き神々の時代といわれている時代のものなのだ。現在発見されたこの時代のダンジョンは片手で数えるほどし

かなく、またそのいずれからも貴重なアイテムが発見されている。

そこには、まだ見ぬ宝が、歴史が、冒険が、強敵達が待ち構えているのである。

人々は未知の境地に憧れ追い求める例えそこに何があろうとも――そう、なにが待ち構えていようとも。

「――――タイ。――――――ベ――タイ。――タ――タイ。――タベ――。――――イ」

人々は突き進む。己が求める真実を、力を、富を得るために。

「食べたい」

「よい――しょっと。ふぃ～やっと終わったぁ。ユートさ～ん、薪運び終わりましたよー。」

下を向くとクランがこちらを見上げて手を振っていた。

「おお、こっちの煙突掃除も今終わったところだ。アル下してくれ」

（了解しました。マスター）

「おや、もう終わったのか、随分と早かったね。それに、新しい薪も用意してくれて――気を利かしてくれてありがとう。年を取るとこういった事はどうも体に堪えてな。ほんと助かったよ」

「いえ、仕事ですから」

ここ数週間俺達は、冒険者としての装備やなにやらを買うための資金を調達するために、雑務系のクエストをこつこつとこなしている。

今日ここへやってきたのも雑務系のクエストのためである。ちなみに、クエスト内容は町はずれの老夫婦が住む家の煙突掃除だ。

初めは雑務系のクエストだけでは資金が貯まるのもだいぶ先だろうなと思っていたのだが、アルが低級魔法しか使えないというデメリットがあるものの全属性の魔法が使え、1日に平均して7、8個のクエストをする事ができ今ではかなりの額が貯まっている。

また、クランの竜人としての身体能力の高さや、俺の俊敏：Bのステータスも仕事をはかどらせる原因の一つになっている。

最も俺の俊敏のBステータスはだてに伝説級と呼ばれているだけではなかった。というか凄すぎだよ、これ。ひとたび俺が体を動かそうものなら、まるで周りの時間が止まっているかのように全てがスローモーションになるのだ。

「いやいや、依頼だからってここまで丁寧にやってくれる冒険者は皆無といってよいほどだよ。嬢ちゃん達は知らんかもしれんが最近では嬢ちゃんの仕事はとてもええて町で人気だぞ、それに三人ともとてもかわええしなぁ」

「そ、そうなんですか」

嬢ちゃん達……。いや、もう否定するのがだるいからいいけど。

（さすがマスター何をしても、人気ですね）

（アル、それは嫌味か）

（はい？）

天然って恐ろしいな。

「ほい、依頼の認証書。またよかったらここに寄っとくれ。なんもねぇじじ、ばばの家だけんども茶くらい出すから。話し相手になってくれると嬉しいしさ」

「はい、こちらこそありがとうございます。またギルドをご利用下さい」

「ありがとうございました。おじいさん」

「失礼します」

「ん～疲れたなぁ。今日はもうずいぶん働いたし午後からは市場の方を出歩いてみないか？アル、クラン」

今日はかなり朝早くからクエストをしているので、もうすでに6件ものクエストをこなしている。

「良いですねユートさんちょうどお金もだいぶ貯まりましたし三人で行きましょうよ」

「私はマスターが行くところならどこへでもついて参ります」

「よし、じゃあ決まりだな。っと、それはそうとしてアル」

「なんでしょうマスター」

「くっ付きすぎ。歩きづらいからもう少し離れて」

先ほどからアルが腕組みをするように体を寄せつけてくるので気になって仕方がない。

主に何がとはいわないが……

「それは無理な相談ですねマスター。先ほどの煙突掃除のために憑依したばかりじゃないですか」

「いや、そうだけどもさ」

先ほどの会話を精霊の憑依の力をよく知っている者が聞いたなら、煙突掃除なんかでなぜ憑依を？　と、疑問に思うことだろう。というか、このような日常の些細なことで危険な魔力反動が伴う魔法を使うなんてバカじゃないのかと大半の者は言うにちがいない。

アルの魔法は、確かに便利だが低級魔法しか使えないという欠点がある。これはアルの体内貯蔵魔力がそれ以上の魔法を使うには足りないからだ。

なので、このまま何もしない状態では先ほどのように煙突の中でホバリングし続けるなんてとうていできることではない。

そもそも、魔力反動でこちらの身が持たない。

では、どうするのかというと、ここで精霊の憑依が出てくるのである。この憑依という技はどうやら憑依する者と憑依される者を一つの同じ存在にするようなのだ。存在が同一であるということは憑依する者とされる者のステータスもまた二人の掛け合わせたものになる。つまり、アルの足りない魔力と存在の力を俺が補っているのだ。

「そういえば、アルさん私ずっと気になっていたことがあるんですけど」

「なんですか、クランさん」

「その、アルさんはどうしてそんなにも多くの属性の魔法を使うことができるんですか」

「ん？　複数の種類の魔法が仕えることっておかしな事なのかクラン」

「そりゃそうですよ、ユートさん。三つの属性の魔法が使えるぐらいならまだ、珍しいなって思うだけですけど全属性なんて普通ありえませんよ。それに、魔工ってなんですか。ユートさんの無もそうですけどこんなの見たことも聞いたこともないですよ。本当なら私、密かに自慢だった三属性持ちをお二人に見せてあっと驚かすつもりだったのに」

拗ねながらクランはギルドカードをこちらに見せた。

クラン・クル・マルグリット

年齢：１３歳
性別：女
筋力：Ｃ
頑丈：－Ｃ
体力：＋Ｅ
俊敏：－Ｅ
精神：＋Ｅ
器用：＋Ｄ
知力：Ｄ
魔力：＋Ｄ
魅力：Ｃ
運勢：Ｅ
存在：Ｄ
職業：竜王女
加護：竜神王の加護
所持魔法属性：光　火　雷
装備：旅人のドレス
所持金：Ｇ１，１００
レベル：１

前回のギルドでのひと騒動の後自分の失言に悔いた俺は、これ以上不要に口を滑らさないようにするためにもステータスの見方とその常識をクランから教わった。

筋力、頑丈、体力、俊敏、器用、魔力、運勢は読んで字のごとく精神は魔法に対する耐性や環境の適応能力、心の柔軟さなどをさす。知力は知識量と発想能力だ。

存在は前回ギルドで教わった通り魔法による魔力反動による負荷がどのぐらい軽減されるかである。

最後に、魅力だが、これはいうなればカリスマ性みたいなものだそうだ。そして、この魅力というのは＋Ｃから人を虜にする一種の幻術のようなもの、“魅了（チャーム）”が一定条件でだがオートで発せられるようになる。

勿論、なぜか魅力：＋Ｂの俺もこの“魅了（チャーム）”をもっているらしい。自分の事なのにどうして、らしいなんていうあいまいな自覚しかないのかというと、俺にはその発動条件も発動した実感もないからだ。どうやらこれまでも何回かやらかしているらしくその度にアルとクランの目線が痛い……。

それにしても、やっぱりクランは竜人（ドラグーン）だからか幼いながらも身体能力が高いな。何気に俺らの中で一番力が強いし。

「あぁ、そういえばまだマスターにもクランさんにもそのことについて話していませんでしたね。ちょうどいい機会ですし市場につくまでの間、魔法のことについて話しましょうか。ご存じの通り魔法とは体内に内包するエーテル、つまりは魔力を媒介にして起こす様々な現象の事です。その原理は、いまだ謎が多いのですが現段階では、体内にある魔力を強い精神、即ち何かへの思いや想像力、自分のあり方などと混ぜ合わせることによって、世界に思いを魔力体として顕現させ起こしていると考えられています。また、魔力は常に生命力と常にリンクしていますので使いすぎると死にます」

マジか、魔法って使いすぎても死ぬのかよ。てか、想像力が魔法を起こす鍵となるってことは、妄想力が豊富な俺は凄まじい大魔導師になれのでは！？

「へ～そんな、原理だったんですね」

おい、クラン自分も魔法をちょくちょく使ってたのに、今まで知らなかったのか。あぶねーなおい。

「そしてこの魔法を発動させる原理なのですがただ思いが強いというだけでは発動することはできません」

クランの問題発言にノーツッコミ！？

つか、なんだ、妄想力だけではどうにもならないのか。

「そう属性です。魔法は自分の持っている属性の魔法しか行使することができないのです。そして、保有できる属性は魔法を行使する者につき最大で三つまで。これは精霊であれ例外はありません。いえ、むしろ精霊の方が自分の司っている物の属性しか使えないので制限がありますね」

「でもそれじゃあ、なおさらおかしいじゃないですか。だってアルさんは全属性使えるじゃないですか」

「そうです。普通ならありえません。さて、ここで一つクイズです。低級でも、とっても便利な魔法ですがそれには常に危険が伴っており、また全ての人が同じ魔法が使えるとは限りません。ですがそれでもその力を手入れようと考えた人間達はある物を作りました。それは一体なんでしょう？　」

うん、さっぱりわからん。

「ん～なんだろ。魔導書じゃないし、精霊様に頼むわけでもないし、え～と、ん～～～～あ！わかったマジックアイテムだ。マジックアイテムですよね、アルさん」

「ご名答。その通りですクランさんマジックアイテムです。あ、マスターはマジックアイテムご存知ありませんでしたね。マジックアイテムとは魔力をもった生命体を殺した時に出てくる、魔石を元に作られたアイテムのことです。これは、魔力を持たない者でも魔法が使えるようになれるという夢のようなアイテムなのです。まあ、大半の物がよくても低級魔法ぐらいの威力なのですが」

「で、そのマジックアイテムがアルとなんの関係があるんだ」

「はい、このマジックアイテムなのですが。これを元に更に考えられた物が一つあります。そう魔工です。魔工とは、膨大な魔力を宿した魔石で造られた部品(ギア)を使って組み立てられた魔力で動く機械のことです。魔工は存在そのものが強力な魔法のようなものなのです。また、魔工はマジックアイテムとは違い魔工に認められた者しか使えません。そして、この私は元は魔工の一つである“自律(オート)人形(トマタ)”なのです。だから、今の私は半分精霊で半分機械人形という奇妙な存在です。わかりやすく言うと、そうですね――体を半分マスターの世界でいうアンドロイドで補っている生命体といったところですかね」

ああ、だから俺を助けてくれた時アルの体からモーターを回しているような音がしたのか。

「ん? 魔工に認められた者しか魔工を使えないってことは、

魔工自体には皆アルみたいにそれぞれの意思があるってことか？」

「いえ、魔工に意思なんてありませんよ。まあ、ある物もありますけど普通はないです。ここでいう魔工とは私のことですよ、マスター」

なるほど、文字通りアルは魔工を司る者ってわけか。

「魔工についてはわかりました。けどそれじゃあユートさんの無属性っていうのは何なんですか？」

「おお、そうだ俺の無っていうのは何なんだ、アル」

「マスターの無属性とは文字通り無です。つまり属性が一つ

もないってことです」

「え！？　じゃあ、なにか俺には魔法は使えないってことか！？」

くそう、せっかくこんなファンタジー世界に来たっていうのに俺、魔法使えないのかよ。

「落ち着てください。マスターそういう意味ではありません。前にクランさんの首輪を外しましたよね」

「ああ、したな」

「実はあれ、マスターの無属性魔法なんですよ」

「そ、そうなのか」

「無属性魔法とは、魔力その物を操る魔法のことです。つまり、マスターは魔力自体をその手で触り操りまた分解できるのです。魔法だってその気になれば掴んだりできますよ。」

すげー、超ツエーな俺。最強なんじゃないか！？　でも……これ何か地味だな、見た目的に。欲を言えばもっとこう、みてくれから凄まじい、見るからに魔法だっていう魔法をつかいたかった。

「ただ、どうやら現在のマスターの力量では操れる魔力の範囲は手の平のみのようです。他に何か使えそうですかマスター？　あと、もう一種類だけマスターは魔法を使うことができそうなんですけど」

「何か使えそうかって言われてもな……」

とりあえず、なにか属性的なものが関わってなさそうな物をあらかたイメージしながら魔力を溜めてみるけど。ただ、イメージするだけで一向に魔法的なものは起きな――――お？なにか力を感じる。

手を前に出してより一層に確かにイメージを深めると。俺の目の前に突如木製で取っ手付きの扉が現れた。

「やりましたね、マスターそれが現段階でマスターが使えるもう一つの魔法のようです。それにほんとなら詠唱などで、イメージをより強固なものにしなければならないものを、無詠唱でするなんて……さすが、マスターです」

扉を開けるとそこにはイメージ通りの縦横共に３０ｍほどの何もない真っ白な部屋があった

「ってええ！？　ユートさんこれ“亜空間魔法（ロストタイムズ）”じゃないですか。ロストマジックですよこれ」

「そんな、名前があるのかこれ。それよりもロストマジックって、何？」

俺が顕現させたこの魔法は、時間概念がない亜空間を作り出す魔法だ。

「ロストマジックっていうのは失われた時代といわれている古代の神々の時代の魔法で、今じゃ一握りの魔術師でしか使うことのできない上級魔法の事ですよ」

「へ～これがね」

「ああ、消しちゃうんですか」

「いや、だって今は必要ないし。つか、俺達は市場へ行くんだから。急がないと日が暮れちゃうよ今日は、目一杯見て回るんだろ？」

「そうですけど、もう少し見ていたかったです。――でも、これなら荷物の量とかあんまり考えなくてもいいですね。最悪野営もこれで済ませられるんじゃないですか」

「ん？　ああ、そうだな。確かに最悪これで凌げそうだ」

「マスター、市場が見えてきましたよ」

どうやら、なんやかんやとしているうちに市場の方についてたようだ。

「うわー、見てくださいユートさん色んな物がありますよ。ふふ、こういうのって何か見ているだけで楽しくなってきません？」

「ああ、そうだなクラン。ほんっと見応えがありそうな賑やかな場所だ。よし！二人とも今日は存分に楽しむぞー」

「おー」　「承知しました」

第八話　傲慢な偽善者

市場はただでさえ人の行き来が多い所だというのに、俺と新しく発見されたダンジョンのせいでさらにあふれんばかりの人でごった返していた。

普段はない出店なども出ており、まるで祭りに来たかのように思える。

いや、実際に彼らにとっては祭りのようなものなのかもしれない。

「これだけ、混雑していたら大人でも迷子になっちまいそうだな。って、あれ、クラン？」

ふと気がつくと先ほどまで隣にいたクランがいなかった

早くもプラグ回収！？

「どこ行ったんだ。――って、あんなとこにいる」

なにやら熱心にショーウインドーを覗きこんでいる。

なになに、メロナ小物商店。なるほど確かに女の子がいかにも好きそうな店だな。

「クランそれが欲しいのか？」

「ゆ、ユートさん！？い、いえ。ただちょっと綺麗だなぁと」

いやいや、そんなあからさまに目を泳がされて言われても……。

クランが見ていたのはどうやら蝶の形を模した首飾りのようだ。

鉄で作られた羽にステンドグラスのような物がはめこんであるもので、確かにそこには目を引きつけられる美しさがあった

「すみませーん、おじさんこれ、いくらですか？」

「銀貨3枚だよ」

うっ、た、高いな。

「じゃあこれでそれを3つください」

「あいよ、お釣りの銀貨1枚だ」

「ゆ、ユートさん！？」

可愛い女の子があんなにも欲しそうにしていたのだ、ここで買わないでどこで買う。

「はい、クラン。それとアルにも」

「え、私にもですか？　――あぁなるほど　」

どうやら、アルも俺の考えに気づいたようだ。

買ったばかりの首飾りを2人に渡す。

「そうだよ、ほらこれで3人お揃いだ。これは遅くなったけど俺達のパーティーの結成祝いと、ここ数日の働きに対する自分達へのご褒美ってとこかな」

こうでもしないと、クランはまた遠慮して受け取ってくれないだろうからな。

それに今言ったことだって本当のことだ。実際俺達は、ここ数日ひたすらクエストを受けて働いていた。そして、その中でもクランは俺達への恩返しのつもりもあってか、人一倍頑張っていたことだって知っている。

さらに、俺達の仕事が評判になっているのはこのクランの頑張りのおかげだというのはここだけの秘密だ。

「で、でも」

しかし、それでもクランは申し訳なさそうに口ごもっている。

「それにこういった綺麗なものは、クランやアルのような可愛い女の子に似合うと思うんだ。それともクランは俺達とのお揃い

はいや？」

「そんなことはっ――！！」

「クランさん、ここは素直に受けっとっておきましょう。それと、以前も言いましたが私達の間で遠慮は無用ですよ。なにより、マスターがそれを望んでいらっしゃいますから」

「すみません。お二人とも――いえ、違いましたね。ありがとうございますユートさんアルさん。でいいの――かな」

恥ずかしそうに、お礼をいうクラン。心なしか俺達三人の絆が深まったように感じた。

「よし、じゃあ買い物の続きに行きますか」

「はい、マスター。野営道具や食糧、調理器具などは粗方買いましたので、後はマスターとクランさんの装備品だけですね」

「ん？　アルのはいらないのか」

「私の戦闘スタイルは、基本魔法での後方支援ですので。それに、今は精霊な上に元々が魔工ですので魔導具（マジックアイテム）無しでも魔法は使えます。あ、防具とかもいりませんよ。基本戦闘中は、マスターに憑依させて頂かせてもらうつもりですので。あの、それでいいですかマスター」

「勿論いいよ。そうか、なるほどそうなると装備は俺とクランだけか。というか、ここまで来て言うのもどうかと思うが。本当に一緒に戦うのかクラン」

「なにを、言うんですかユートさんあり前じゃないですか。あんまり私をお子様扱いしないでください」

「いや、だけどなぁクラン」

「大丈夫ですよ、ユートさん。これでもただの温室育ちのお姫様ではないんですよ。それなりに武芸も教わってきています。それに、私は竜人（ドラグーン）ですよ。並みの人間達よりは、頑丈ですし力もあります」

クランはまっすぐと俺の瞳を見ながらここだけは譲れないと訴えかけてくる。

「はぁ、わかったよ。しかたないな。納得はしてないけど、これ以上は何もいわないよ。それじゃあ装備はどうする？　クランも魔法で後方支援？」

「いえ、私は剣での近接戦闘の方が得意です。それにいざとなったら竜化もそちらの方が、アルさんやユートさんに迷惑かけないで済みますし」

「あ、やっぱり竜人（ドラグーン）の人達は、竜化ができるんだな」

「あ、いえ、そんなことはないですよ。これは私が竜人（ドラグーン）の王族だからできるんです。一般の竜人（ドラグーン）は竜化できませんよ。なんでも、

私達の先祖が竜神様だったらしくそのおかげで竜化が使えるんです。竜化はその見た目だけでなくステータスも同様に一時的にですが爆発的に上がるんです。それゆえにこの力を欲しがる人達が私達の血を欲しがるってこともざらにあるんですけどね」

「そうか……わかった。じゃあクランには剣と防具を買って前衛を務めてもらうことにするよ。っと、そうなってくると俺はどうすればいいかな。能力的に前衛だろうけど何を使えばこの無属性魔法を生かせるだろうか」

「籠手を買われたらどうですか？　ユートさん」

「ん～、いくら相手の魔力回路を弄って戦うたって、魔物相手に素手で戦うのはなぁ。ずっと魔法が使えるってわけでもないしどうやらスライム種とかもいるらしいからなちょっと抵抗が……。日本刀とかがあればいいんだが」

こちらに来る以前は、星羅のせいで剣道を少しだがしていたのだ。というのも星羅の家が我流の剣道の道場をやっていたからである。幼いころから強かった星羅に引きずられる形でよく道場に連れて行かされたものだ。ホントあの地獄をよく生きてたな俺……。

まぁ、結局俺は全然できなかったんだけど、全然使い慣れていない物よりはいいだろう。あと、日本男児として刀に憧れを抱いているというのも無きにしも非ずだ。

「ニホントウ？　聞いたことないですね。なんですかそれは」

う、やっぱりないのか日本刀。

「日本刀っていうのは、こう片側にしか刃がついていない剣で、ロングソードとかのように叩きつけるように使うんじゃなくて断ち斬ることや突くことに特化している武器のことだよ」

「そのような武器は私は見たことないです。アルさんは？」

「私もありません。どうやらニホントウというのはマスターの世界だけの物みたいですね」

「そうなのか……ま、まあこんな道端で悩んでいても仕方ないよな。とにかく店に行こう、もしかしたらそれらしいものが見つかるかもしれない」

「そうですね。行きましょう、マスター。確か武器屋は向こうにあるメインストリートを右に曲がってギルドガある方へ行ったところです」

予想外に、この町の武器屋には結構な種類の武器が揃えられていた。それこそ、普段じゃ滅多にお目にかかれないだろうドラゴンの鱗を使った装備なんかもあったほどだ。

だが、結局俺に似合う武器は見つからなかった。とういうか刀に似たものが一つもなかったのだ。仕方がないのでクランのロングソードとバックラーと共に俺も同じ剣と皮の籠手を買うことにした。

「素手だけじゃ心持たないからロングソードも買っちゃたけ

ど、はたして俺にこれを扱いきることができるのだろうか」

正直かなり不安だ。重さ的には難なく振るうことができるが、やはりどこか違和感を感じてしまう。

「大丈夫ですよ、マスター。マルターの速さには並みの相手では、見ることさえかないませんから。それに、私の“魔力観測”はただマルターに魔力回路を見せるだけではありませんよ」

「え、そうなの？」

「はい、“魔力観測”では、魔力回路同様マルターから半径１０ｍだけですが、マスターの最良の行動になるであろう次の行動をも予測し見せるのですから」

「そうかそれは頼もしいな。まぁ、まだ日本刀への名残はな

くなっていないけど当分はこのロングソードで我慢するか――」

「ど、ドロボー！！」

「――な。なんだ、なんだ？」

声のする方を振り返ると、俺と同じく何事かと驚いている人々の波を掻き分けてフードお化けと毛むくじゃらお化け。もとい、大柄のおっさんとぼろ衣をまとった１０歳そこそこの少年がこちらに向かって走ってきていた。

「きゃ！！な何」「いて！まて、このくそ餓鬼」「っわ、な、何だ」

「くぉらぁ待ちやがれ～！！誰か～そこのくそ餓鬼つかめぇてくれ～」

「だれが、待てと言われて待つもんか！！」

どうやら、あのおっさんはあそこにいる少年に何かを盗まれたようだ。というか、あのおっさんどこかで見たような？　はて、誰だったか。

「っく～すばしっこい奴だ。おぉい、そこのフード被ってるあんた捕まえてくれぇ！！」

ふむ、まだ距離はあるがこちらに真っ直ぐに向かってきている、さてどうしようか。少年の方も見てくれからしてなにやら訳ありのようだが――。

「っとくそ、どけ、そこの黒チビ女」

かっちーん。

「うぇ？な、ナニ！？は、離しやがれ。このくそばばぁ！！」

俺は、瞬く間に少年の後ろに回り込み首根っこをつかみ上

げる。

「だーれーが女だ！！俺は男だー！　あと、チビでもない。断じてチ・ビ・ではない。つか。お前の方がチビだろが！！」

「お、男！？　ってそんなことはどーでもいいー。離せーくそー！！」

「はぁ、はぁ、あ、ありがてぇ。その餓鬼を捕まえてくれて。誰だか知れねえがほんとたすかった。――って、なんでぇ、ユート達じゃねぇか」

――あ！　思い出した。どっかで見たことあるなと思ったらこのおっさん、確か回復薬専門の薬草屋の店主のマブリタさんだ。

このマブリタさんという人は俺達のことを御用達にしてくれてる人の一人で、クエストを受けるうちに次第に仲良くなっていったのだ。

ん？　って、ことはこの少年が盗んだのは回復薬かそれに関する薬草ってことか……。どうやら、本当にただの万引きとかではなさそうだ。もし、ただ金に困っての万引きなら先ほどの小物店などから盗むことだろう。

「お前達には助けてもらってばかりだな。ホント助かったありがとうな」

「いえ、それよりもマブリタさん、何を盗まれてんですか？」

「ん？　あぁグリーンポーションのもとになる薬草をな」

グリーンポーションの元ってことは銅貨５０以下のものだよな。

グリーンポーションとは、冒険者にとっては欠かせないアイテムの一つで体力をある程度回復させ、かすり傷程度なら即座に癒すことのできる回復薬のことだ。

「すみませんがこの子の盗んだ物を４倍の銀貨２枚で買い取る代わりに、この子のことを俺達に任せてくれないですか？」

「え！？　ん～～本当ならしょっ引いて騎士団の所へ連れていくとこだけど、仕方ねぇな。いつもお世話になってるユート達のお願いだ。その餓鬼くれてやるよ。ただし、今回だけだからな。――しかし、なんでまた、そんなことを」

「ただの気まぐれだと思ってください、では俺達はこれで」

「お、おう」

マブリタさんにお金を払って少年を連れていく。

「お、おい。お前……オレを助けたりなんかして、な、何が望みだ、って、いて！何しやがる」

「お前じゃない。俺の名前はユート。ユート・カミサカだ。こっちの２人は仲間のアルとクラン。君は？」

「……キア・ソルト・メディスン」

「キアを助けたのは、さっきも言ってた通りただの気まぐれだ。気にしなくてもいい」

厳密にいうと気まぐれとは少し違っていて俺は、この少年に少し興味が湧いたのだ。

この町は、いくらど田舎で寂れている町であってもストリートチルドレンや浮浪者などといった人達が粗全くと言ってよいほどまでにいないある程度豊かな町である。

どうやら、ギルドが国と一緒に孤児院の設備を設けたり仕事を与えていたりすることに力を注いでいるからしい。

なのに、このキアという少年は、それこそ出会った頃のクランのような、見るからにぼろぼろの服装をしている。ここの孤児院の子供達だってもっとましな格好をしているだろう。

この町でこのような格好をしている者に出会おうものならそれこそ数少ない奴隷の者達にでも会わなければならないだろう。しかし、この少年は奴隷の証ともいえる“奴隷の首輪”をしていない。これはおかしなことだ。それに、なぜグリーンポーションの元になる薬草を盗もうとしたのだろうか。

「そんなことよりもキア、どうして薬草を盗もうとなんかしたんだ？　」

「……」

「だんまりか。それは、キアのそのぼろぼろの格好と何か関係があるんじゃないのか？」

「っつ！！――そ、そんなこと、ユートには関係ないだろ。なんで俺がそんなこと答えなきゃいけないだよ！だいたい、俺とユートはさっき出会ったばっかりの赤の他人だ」

「うん、確かに俺とキアはさっき出会ったばっかりの赤の他人で、全くこれっぽっちも関係性はない。それこそ、こそ泥とそれを捕まえた一介のＦ－ランク冒険者だ。それに俺は、善徳を説いて

人々を導く聖職者でも全てを救おうとする聖人君子でもない」

「じゃ、じゃあなんで」

「俺はな、キア。とっても我が儘なやつなんだ。自分の気に入らないことがあれば力ずくででもそれを捻じ曲げて自分のやりたいことを押し通す。俺は俺のルールを貫きやり通す。例え誰が何と言おうがな。それが俺の正義でありモットーだ。そして、キアはそんな横暴で傲慢な偽善者である俺に運悪く見つかってしまった。これは、もう俺に助けられるしかないな」

「そんなの……滅茶苦茶だ……」

「そうさ、滅茶苦茶さ。だけど、そんな滅茶苦茶な俺でもキアの話を聞いて何かできることがあるかもしれない。そうだろ？」

俯いて若干涙ぐんでいるキアの頭をそっとなでてやる。やはり、強がっていても子供のようだ。

「こ、こんなのずるいよ……グス……こんなに優しくされちゃあどうしようもないじゃないか……もう誰も俺達を助けてくれないと思っていたのに……神様なんていないんだと思っていたのに……」

「すまない、クラン、アル。そういう訳でこの子を助けたい。悪いが協力してくれ」

「ふふ、わかってますよ、ユートさん。勿論手伝うに決まってるじゃないですか。それに、ここ数日ただ一緒に過ごしていたわ

けじゃないんですよ？　ユートさんがそういう優しい人だって重々わかってますから」

「マスターはマスターのやりたいことをやられればいいのです。」

「すまないな二人とも」

優しいのはクランとアルも何だがな。笑顔で了承してくれた二人の優しさにつられて俺も微笑んでしまう。

それじゃあ、この優しい竜と精霊と共に偽善者がいっちょ一人の少年を助けてみようじゃないか。

「キア、もう一度聞く。どうして薬草なんかを盗んだんだ？」

俺は傲慢な偽善者だからな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9624x/

トランスマイクリエーション

2011年12月27日00時08分発行